特別史跡　西都原古墳群発掘調査報告書　第３集

西都原（さいとばる）１００号墳

２００２年３月

宮崎県教育委員会

特別史跡　西都原古墳群発掘調査報告書　第３集

西都原（さいとばる）１００号墳

２００２年３月

宮崎県教育委員会

序

県教育委員会では、平成７年度から、文化庁の「地方拠点史跡等総合整備事業（歴史ロマン再生事業)」による助成を得て、西都原古墳群の新たな整備を進めております。

100号墳については、平成10年度から12年度にかけて発掘調査を行い、整備の基礎となる貴重な資料を得ることができました。本書は、同調査により得られた様々な成果について報告するものです。

この報告書が、学術研究においてはもちろん、学校教育や生涯学習の場においても活用され、遺跡や文化財に関する理解を深める一助となることを期待いたします。

本事業を進めるにあたり、御理解・御協力を賜った地元住民の方々をはじめ、指導委員会の先生方や各関係の皆様に対し、衷心よりお礼申し上げます。

平成14年３月

宮崎県教育委員会
教育長 岩　切　正　憲

例　言

1　本書は、文化庁の「地方拠点史跡等総合整備事業（歴史ロマン再生事業）」による助成を得て、平成10年度から平成12年度にかけて発掘調査を実施した西都原100号墳の発掘調査報告書である。墳丘整備については、別途報告予定である。

2　発掘調査は宮崎県教育委員会文化課が行い、整理作業については宮崎県埋蔵文化財センターにおいて実施した。

3　現地調査における図面作成や写真撮影は、高橋誠、東憲章、松林豊樹が行ったほか、天理大学考古学研究室の御協力を頂いた。

4　空中写真撮影は、(株)スカイ・サーベイ、(株)九州航空に委託した。

5　古墳群の地形測量は、(株)太平洋航業に委託した。

6　発掘調査以前の現況墳丘測量及び葺石の写真測量は、(株)村上測量に委託した。

7　地下レーダー探査は、マイアミ大学地質音響研究所中島研究室に委託した。

8　出土遺物の整理・実測・製図は、松林のほか、宮崎県埋蔵文化財センターの整理作業員の協力を得て行った。

9　本書の執筆・編集は松林が行った。

10　調査によって出土した遺物や調査に伴って作成した記録類は、宮崎県文化課及び宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。

本　文　目　次

第Ⅰ章 はじめに …… 1
　第1節　調査に至る経緯 …… 1
　第2節　調査組織 …… 1
第Ⅱ章 位置と環境 …… 3
　第1節　日向地方の古墳分布状況 …… 3
　第2節　宮崎平野部の古墳分布状況 …… 4
　第3節　西都原古墳群の概要 …… 8
第Ⅲ章　100号墳の調査 …… 18
　第1節　調査の概要 …… 18
　第2節　墳丘 …… 22
　第3節　葺石 …… 33
　第4節　周溝 …… 33
　第5節　墓壙 …… 34
　第6節　出土遺物 …… 44
第Ⅳ章　まとめ …… 51
　第1節　墳丘形態について …… 51
　第2節　出土土器について …… 51
　第3節　まとめ …… 52

挿　図　目　次

第 1 図 日向地方の主要古墳分布地域と前方後円墳分布図 …… 5
第 2 図 宮崎平野部の高塚古墳分布図 …… 6
第 3 図 西都原古墳群全体図（1／20,000） …… 9
第 4 図 A～E・M・N群（1／5,000） …… 11－12
第 5 図 F・G群（1／5,000） …… 13
第 6 図 H・I群（1／5,000） …… 14
第 7 図 I・J・K群（1／5,000） …… 15
第 8 図 L群（1／5,000） …… 16
第 9 図 西都原100号墳墳丘測量図（1／500） …… 19
第10図 平成11年度調査区設定図（1／400） …… 20
第11図 平成12年度調査区設定図（1／400） …… 21
第12図 西都原100号墳墳丘復元図（案） …… 24
第13図 墳丘断面図①（A－SW、A－W、A－NW） …… 25－26
第14図 墳丘断面図②（A－NE、A－E、A－SE） …… 27－28
第15図 墳丘断面図③（A－N、W－B－E、W－C－E） …… 29－30
第16図 墳丘断面図④（A－C－S） …… 31－32

第17図　くびれ部周辺葺石検出状況（1／50）……35－36
第18図　前方部前端葺石検出状況（1／50）……37－38
第19図　前方部東側葺石検出状況（1／50）……39
第20図　墳端～周溝付近断面図①（A－SE、A－E、A－NE）……40
第21図　墳端～周溝付近断面図②（B－E、B－W、C－E、C－W）……41－42
第22図　墳端～周溝付近断面図③（A－NW、A－W、A－N、A－SW）……43
第23図　遺物出土状況（1／400）……45
第24図　墳頂中央部遺物出土状況（1／20）……46
第25図　出土遺物実測図①（1／4）……48
第26図　出土遺物実測図②（1／4・1／2）……49
第27図　西都原古墳群の前方後円墳（1／2000）……55
第28図　宮崎県内の古墳出土壺形土器・埴輪（S＝1／8）……56

表　目　次

第1表　宮崎平野部の主要古墳群古墳構成……7
第2表　西都原古墳群における各小群の古墳構成……17
第3表　西都原100号墳墳丘各部復元規模一覧……23
第4表　西都原100号墳出土土器観察表……50

図　版　目　次

図版1　①西都原古墳群B～E・N群（南上空から）②西都原古墳群C・D・N群（南上空から）……57
図版2　①西都原古墳群主要部（北西から）②100号墳と周辺の古墳（上空から：上が東）…58
図版3　①調査以前の100号墳（東上空から）②調査以前の100号墳（上空から：上が西）……59
図版4　100号墳墳丘検出状況……60
図版5　①100号墳墳丘検出状況（東上空から）②100号墳墳丘検出状況（南上空から）……61
図版6　①100号墳墳丘検出状況（南東から）②100号墳墳丘検出状況（東から）……62
図版7　①東側くびれ部周辺②西側隅角周辺……63
図版8　①東側隅角周辺②東側隅角と攪乱による地形改変状況……64
図版9　①前方部東側1段目根石列②前方部東側2段目根石列……65
図版10　①西側くびれ部周辺遺物出土状況②①に同じ（墳丘上から）……66
図版11　①墳頂平坦面中央部遺物出土状況（南から）②①近影……67
図版12　墳頂平坦面中央部出土遺物集中部近影……68
図版13　100号墳出土遺物1……69
図版14　100号墳出土遺物2……70

第Ⅰ章　はじめに

第1節　調査に至る経緯

西都原古墳群は、宮崎県の中央部に位置する西都市大字三宅に在り、標高60m前後の洪積台地上を中心として分布する総数300基を超える大古墳群である。

本古墳群では、大正年間に我が国初の本格的な古墳発掘調査が実施され、日本考古学史上に残る大きな成果を上げている[1]。その後、昭和9（1934）年には国の史跡、昭和27（1952）年には特別史跡として指定され、昭和44（1969）年から全国に先駆けた「風土記の丘」整備事業が行われた[2]。これらの整備によって、周辺景観に調和した秀麗な史跡として高い評価を得てきた反面、大正年間の調査以降、数基の地下式横穴墓に関する調査しか行われていなかったことから、古墳群の歴史的な解明や理解、それに根差した文化的・教育的活用については、脆弱さが指摘されてきた。

宮崎県教育委員会では、こうした時代の要請に応じた西都原古墳群の在るべき姿を検討するために、平成5（1993）年に「西都原古墳群保存整備検討委員会」を設置し、2カ年にわたる検討によって『西都原古墳群保存整備活用に関する基本計画』をまとめ、新たな史跡整備の実施に向けた準備を整えてきた。そして、平成7（1995）年度から国の補助事業「大規模遺跡等総合整備事業(古代ロマン再生事業)」が新設されたことを受けて、西都原古墳群の保存整備事業に着手することとなった[3]。

同整備事業に伴って、これまでに実施した発掘調査は、鬼の窟古墳、205号墳、13号墳、酒元ノ上横穴墓群、171号墳、169号墳、100号墳、173号墳で、一部は調査継続中である[4]。また、陵墓参考地である男狭穂塚・女狭穂塚については、宮内庁の協力を得て、地方自治体としては初めての測量調査を実施している[5]。

ここに報告する100号墳については、平成10（1998）年度から同12年度にかけて調査を実施し、本年度より一部墳丘整備に着手している。

第2節　調査組織

100号墳の発掘調査は、宮崎県教育委員会が主体となり、西都原古墳群保存整備指導委員会及び文化庁の指導のもとに実施した。なお、遺物等の整理作業については、宮崎県埋蔵文化財センターにおいて行った。

発掘調査から報告書作成年度における調査組織は、以下のとおりである。

西都原古墳群保存整備指導委員会

委　員　長	日　高　正　晴	西都原古墳研究所長	（平成10～13年度）

委　　員	大塚初重	明治大学名誉教授	(平成10～13年度)
	水野正好	奈良大学学長	(平成10～13年度)
	小田富士雄	福岡大学教授	(平成10～13年度)
	杉本正美	九州芸術工科大学教授	(平成10～13年度)
	柳沢一男	宮崎大学教授	(平成10～13年度)
顧　　問	斉藤　忠	大正大学名誉教授	(平成10～13年度)

事務局（宮崎県教育委員会）

教育長	笹山竹義	(平成10～12年度)
	岩切正憲	(平成13年度)
教育次長	川崎浩康	(平成10年度)
	新垣隆正	(平成11年度)
	福永孝義	(平成12～13年度)
教育次長	岩切正憲	(平成10～12年度)
	川口靖文	(平成13年度)
文化課長	仲田俊彦	(平成10～11年度)
	黒岩正博	(平成12～13年度)
課長補佐	矢野　剛	(平成10～11年度)
	井上　貴	(平成12～13年度)
主幹兼庶務係長	井上文弘	(平成10～11年度)
	長谷川勝海	(平成12～13年度)
予算編成担当	櫻木真治	(平成10年度)
	向井大蔵	(平成11～13年度)
予算執行担当	礒貝仁美	(平成10～12年度)
	山村伊智子	(平成13年度)
埋蔵文化財係長	北郷泰道	(平成10～11年度)
西都原対策班主幹	北郷泰道	(平成12～13年度)
整備担当	飯田博之	(平成10～11年度)
	重山郁子	(平成12～13年度)
	和田理啓	(平成13年度)
調査担当	松林豊樹	(平成10～11年度)
	高橋　誠	(平成12年度)
整理・報告書担当	松林豊樹	(平成13年度)

調査協力

西都市教育委員会、天理大学

第Ⅱ章　西都原古墳群の概要

第1節　日向地方の古墳分布

九州島の南東部に位置する宮崎県および鹿児島県東部の大隅半島を含む地域は、律令期の大隅国分国以前には、ともに日向国として捉えられていた。本地域では、前方後円墳や円墳などの高塚古墳のほか、横穴墓、組合式や刳抜式等の石棺、地下式横穴墓、地下式板石積石室墓といった古墳時代墓制が、大小河川流域に形成された平野や盆地毎に群在しており、その分布状況から、大きく以下の8地域に分けて捉えることができる[6]（第1図）。

①五ヶ瀬川上流域を中心とする内陸部　（西臼杵地域）
②五ヶ瀬川・北川下流域を中心とする平野部　（延岡地域）
③塩見川下流域を中心とする平野部　（日向地域）
④小丸川、一ツ瀬川、大淀川下流域を含む広義の宮崎平野部（宮崎平野部地域）
⑤大淀川中流域の都城盆地周辺部　（都城地域）
⑥大淀川、川内川上流域を中心とする内陸部　（西諸県地域）
⑦広渡川下流域を中心とする平野部　（日南地域）
⑧志布志湾沿岸を中心とする地域　（志布志地域）

①の西臼杵地域には、少数の円墳、横穴墓136基、組合式石棺12基ほどが確認されている。円墳については、調査事例がないためその存在自体判然としないが、円墳であるとすれば主体部には組合式石棺が採用されている可能性が高いと考えられる。墓制としては横穴墓の分布が卓越する地域といえる。

②の延岡地域では、10基前後の前方後円墳を含む高塚古墳約60基と組合式石棺30基、刳抜式石棺10基、横穴墓15基が確認されているが、相対的には高塚古墳の分布が多いといえる。ただし、これまでに調査された円墳主体部には石棺が採用されているものが多いことから、その割合を単純に判断することはできない。主体部に石棺を採用する古墳が多いことは、①を含む五ヶ瀬川流域の地域的特色の1つといえる。

③の日向地域では、前方後円墳1基を含む高塚古墳29基、横穴墓7基が確認されており、全体的に古墳の分布数が少ない地域であるが、高塚古墳の分布が主体的な地域といえる。

④の宮崎平野部地域には、100基を超える前方後円墳を含む高塚古墳約1200基、550基を超える横穴墓、200基を超える地下式横穴墓が確認されている。分布する古墳数や前方後円墳の規模など、全ての面で他の7地域を圧倒している。本地域に所在する古墳群には大規模なものが多く、高塚古墳・地下式横穴墓・横穴墓が同一古墳群内に含まれるものもみられる。横穴墓については、その築造ピークが高塚古墳・地下式横穴墓よりも遅れることが指摘されている[7]ことから、高塚古墳と地下式横穴墓の併存状況を考えると、前者が主体的な地域といえよう。

⑤の都城地域では、前方後円墳数基を含む高塚古墳約90基、100基を超える地下式横穴墓、4基の組合式石棺墓、1基の地下式板石積石室墓が確認されている。高塚古墳には小規模な円墳が多く、主体部に地下式横穴墓を採用している可能性があることから、高塚古墳よりも地下式横穴墓の分布がやや優勢な地域といえる。

⑥の西諸県地域では、数基の円墳、478基の地下式横穴墓、地下式板石積石室墓が確認されている。数基存在する円墳も主体部に地下式横穴が採用されている可能性が高く、地下式横穴墓が主体的に分布する地域といえる。なお、隣接する鹿児島県側の川内川流域や熊本県側の球磨川流域では、地下式横穴墓に対する地下式板石積石室墓の分布する割合が高くなる傾向がみられる。

⑦の日南地域では、少数の円墳、組合式石棺が確認されているのみで、③の日向地域と同様に古墳分布が少ない地域である。

⑧の志布志地域では、20基前後の前方後円墳を含む高塚古墳200基あまり、地下式横穴墓120基以上が確認されている。高塚古墳と地下式横穴墓が混在する古墳群が多く、宮崎平野部地域に類似した在り方を示すが、横穴墓は分布していない。

以上のように、8つの地域ではそれぞれ特徴的な古墳時代墓制の分布状況を示すが、高塚古墳の中でも畿内勢力との強い結びつきが予想される前方後円墳の分布に注目すると、②・③・④・⑤・⑧の5地域に約160基が分布している。その内の8割にあたる約120基が④の宮崎平野部地域に集中していることから、宮崎平野部地域は古墳時代における日向地方の政治的中心を担った地域であった可能性が高いと考えられる。

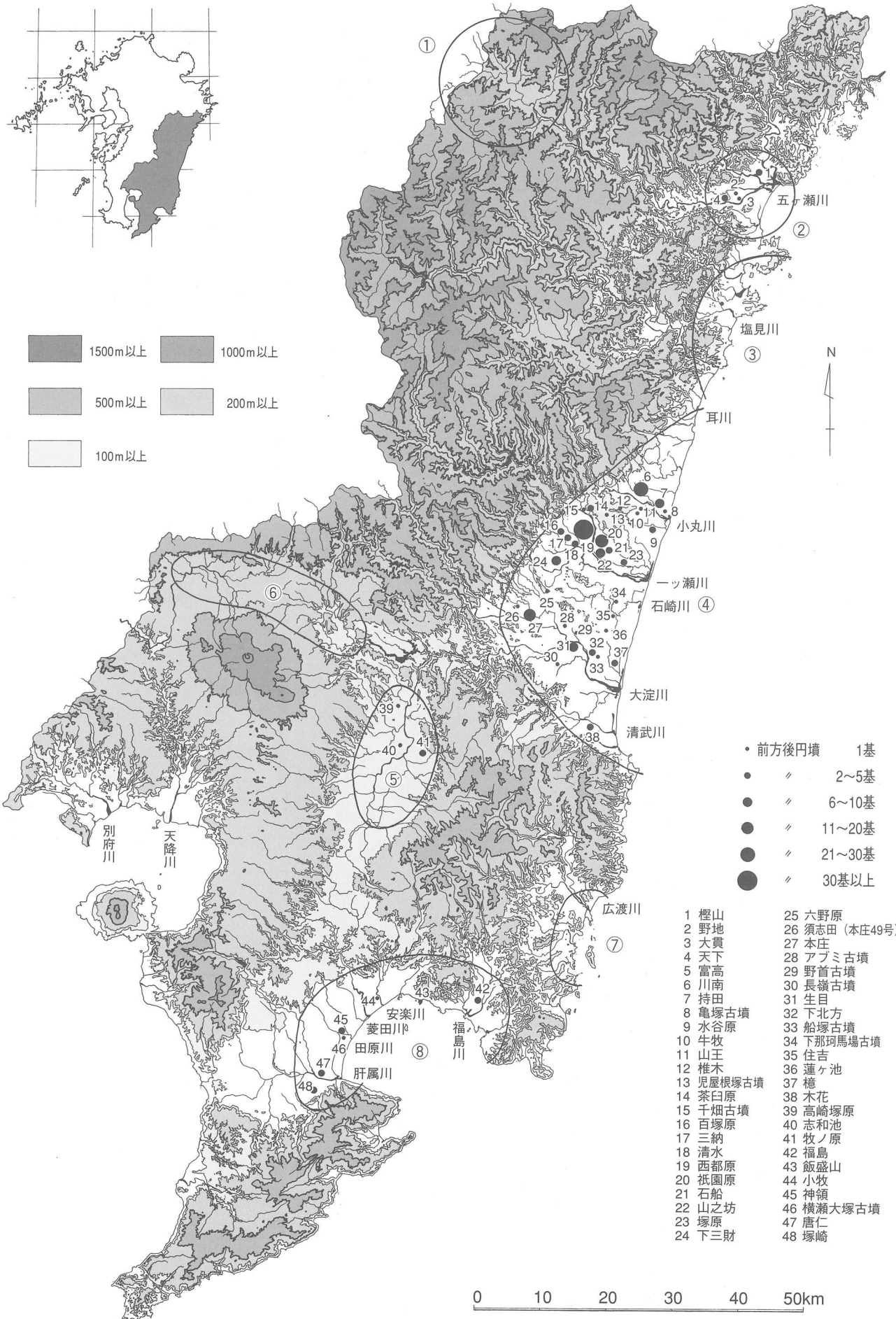
第2節　宮崎平野部の古墳分布

ここでいう宮崎平野部は、児湯郡都農町から東諸県郡綾町を結ぶ九州山地と、綾町から宮崎市青島を結ぶ南那珂山地の地形区分線及び東の日向灘に面する海岸線に囲まれた南北に長い三角形状に広がる地域である。この地域には、前節で述べたように日向地方全域に分布する前方後円墳の約8割が集中しているが、多数の前方後円墳を擁する主要古墳群は、平野部を東流する河川流域毎に大きく以下の4地域に分布が集中している（第2図）。

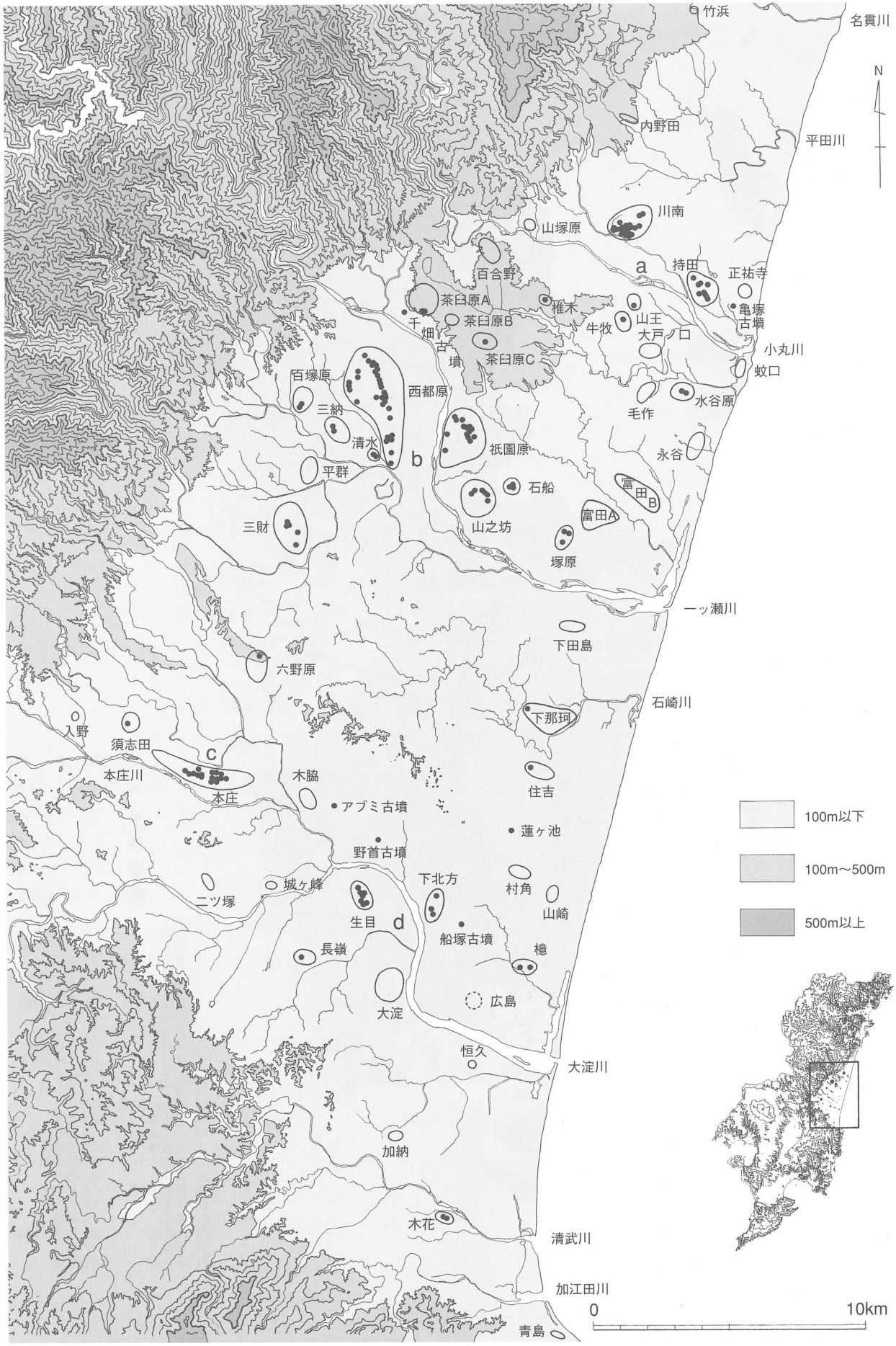
a　小丸川下流域を中心とする地域　　（高鍋・川南地域）
b　一ツ瀬川中・下流域を中心とする地域（西都・新富地域）
c　本庄川流域を中心とする地域　　（国富地域）
d　大淀川下流域を中心とする地域　　（宮崎地域）

以上の4地域に分布する主要古墳群の古墳構成は第1表のとおりで、ここに上げた古墳群だけで、宮崎平野部に分布する高塚古墳の70％以上を占める。

高鍋・川南地域では、小丸川下流域でもその左岸に大規模な古墳群がみられる。また、この地域では、従来地下式横穴墓の存在は確認されていなかったが、現在行われている東九州自動車道建設



第１図　日向地方の主要古墳分布域と前方後円墳分布図



第２図　宮崎平野部の高塚古墳分布図

に伴う発掘調査により、小丸川右岸の牛牧古墳群内で8基が確認されている[8]。

西都・新富地域は、宮崎平野部の中でも最も高塚古墳の分布が集中する地域である。この地域を代表する古墳群が、一ツ瀬川右岸の西都原古墳群と左岸の祇園原古墳群である。西都原古墳群には、前期段階の築造とみられる前方後円墳が多く、中期の男狭穂塚・女狭穂塚の登場で前方後円墳の築造はピークを迎え、それ以降には顕著な首長墓の築造は少ない。一方、祇園原古墳群では、後期段階に70m級の前方後円墳が多く築造されており、西都原とは対照的な在り方を示す。

国富地域では、国富町の市街地周辺に本庄古墳群が分布している。本庄古墳群には16基の前方後円墳が分布しており、調査例がないため判然としないが、その墳形は中期～後期的なものが多い。

宮崎地域では、大淀川を挟んで右岸側に生目古墳群、左岸側に下北方古墳群が分布している。生目古墳群には140m級の3基（1・3・22号）をはじめとする7基の前方後円墳があり、墳形から前期段階の築造と考えられるものが大半を占める。下北方古墳群には4基の前方後円墳が分布し、全て中期～後期的な墳形である。このことは、前期段階に宮崎平野部において圧倒的な権勢を誇っていた生目勢力が衰退し、中期以降には大淀川下流域の覇権さえも下北方勢力に奪われた可能性を示唆している。また、前述した国富地域は本地域のやや上流域にあたり、本庄古墳群の前方後円墳築造数が生目の衰退以降に増加する傾向がみられる点も重要である。

以上、宮崎平野部の主要古墳群が分布する4つの地域について、その概要を述べたが、日向地方の政治的中心地であったと考えられる本地域の中でも、西都・新富地域の古墳の在り方は、その数や規模の上で際だった存在である（第1表参照）。前期段階では宮崎地域の生目勢力には及ばないものの、複数の首長墓系譜が存在し、中期以降の男狭穂塚・女狭穂塚の築造から祇園原勢力が台頭する状況をみると、西都・新富地域には古墳時代を通じて宮崎平野部を代表する有力な勢力が存在し、中期以降には畿内勢力との深い関わりを持った政治的拠点であったと考えられる。このことは、律令期の日向国府や国分寺等が本地域に置かれたことからも想像に難くない。

第1表　宮崎平野部の主要古墳群古墳構成

古墳群名	指定名称	地域	高塚古墳					横穴墓	地下式横穴墓
			総数	前方後円墳	円墳	方墳	不明		
川南古墳群	川南古墳群(国)	川南・高鍋	60	24	30		6	－	－
持田古墳群	持田古墳群(国)	川南・高鍋	85	10	75			6	－
茶臼原古墳群A	茶臼原古墳群(国)	西都・新富	37	2	35	1		－	－
西都原古墳群	西都原古墳群(特)	西都・新富	323	31	291			15	39
下三財古墳群	三財村古墳(県)	西都・新富	39	5	33	1	1	－	－
祇園原古墳群	新田原古墳群(国)	西都・新富	190	14	174		1	8	6
山ノ坊古墳群	新田原古墳群(国)	西都・新富	41	6	34		1	4	－
下北方古墳群	下北方古墳群(県)	宮崎	16	4	12			?	9
生目古墳群	生目古墳群(国)	宮崎	34	7	27			9	15
本庄古墳群	本庄古墳群(国)	国富	45	16	29			2	36
合計			870	119	740	2	9	44	105

第３節　西都原古墳群の概要

西都原古墳群は、西都市大字三宅に所在する一ッ瀬川右岸の沖積微高地（標高20ｍ前後）から西に展開する数段の段丘面（標高30～80ｍ）上に点在する古墳の総称である。東西2.6㎞、南北4.2㎞という広大な分布域に、前方後円墳31基、円墳292基、方墳１基、横穴墓15基、地下式横穴墓39基が確認されている[9]。この分布状況や構成する古墳の特徴等をみると、既に指摘[10]があるように、西都原古墳群は小群の集合体である可能性が高い。そこで、異論もあろうが、ここでは14の小群に分ける案（第３図）を提示し、以下、各群毎にその概要を述べる[11]。なお、各小群における古墳構成は第２表のとおりである。

Ａ群（第４図）は、風土記の丘整備以降、第１古墳群と呼ばれていたもので、前方後円墳６基、円墳82基で構成され、古墳数では14群中最大規模である。本群に含まれる前方後円墳は、1・13・35・46・56・72号の６基で、この内の４基（13・35・56・72号）が大正年間に発掘調査され、13号については今回の事業によって再調査を実施している。群の大部分を構成する円墳については、11基（2・22・27・36・51・57・70・71・73・80・274号）が大正年間に調査されているが、築造時期が明らかなものが少なく、判然としない。しかし、小規模なものの多いことから、大半は後期段階の群集墳である可能性が高い。前方後円墳は、調査成果や墳形から前期の築造と考えられるものがほとんどである。

Ｂ群（第４図）は、風土記の丘整備以降、Ｃ群とともに第２古墳群とよばれているが、両群の間には小規模な谷地形（第３図ではわかりにくいが、92号とその北に近接する円墳の間にある。第４図参照）が存在することから、92号から81号までの範囲についてＢ群とした。前方後円墳６基、円墳６基で構成される。大正年間に調査されたのは円墳の84号のみで、６基の前方後円墳（81・83・88・90・91・92号）はすべて未調査であるが、前方部が低平で長い形状のものが多く、前期段階の築造である可能性が高い。

Ｃ群（第４図）は、Ｂ群の北、Ｄ群の東に位置し、前方後円墳４基、円墳19基で構成される。ここに報告する100号は本群に含まれ、他の３基の前方後円墳（95・99・109号）及び円墳は未調査である。また、99号の西側に分布する円墳周辺では、数基の地下式横穴墓が検出され、発掘調査されている。４基の前方後円墳は、Ａ・Ｂ群に分布するものと同様に、その墳形から前期段階の築造が予想される。

Ｄ群（第４図）は、従来Ｎ群とともに第３古墳群とよばれているが、近年西都市が実施した発掘調査による成果や宮崎県史編纂事業に伴って作成された地形図によると、Ｃ・Ｎ両群との間には溝状遺構が存在する可能性が高く、この南西に開口する方形状の溝に囲まれた部分とその南に近接した３基をＤ群とした。高塚古墳としては円墳52基で構成され、小規模なものが多いことから大半は後期の群集墳である可能性が高い。また、111号の墳丘下では甲冑３を含む豊富な副葬品が出土した４号地下式横穴墓が調査されており、周辺に分布する円墳にも地下式横穴墓を主体部に採用するものが多く存在する可能性が高い。

Ｅ群（第４図）は、九州最大の前方後円墳である女狭穂塚、全国屈指の帆立貝形前方後円墳（も

第３図　西都原古墳群分布図（1／20,000）

しくは造出付円墳）である男狭穂塚、両墳の陪塚とみられる169～171号の5基の古墳で構成される。169～171号は大正年間に調査され、169・71号の両墳は、今回の事業により再調査がなされている。また、男狭穂塚・女狭穂塚は、陵墓参考地として現在立ち入りが制限されているが、平成9年に宮内庁の協力を得て、宮崎県教育委員会が墳丘の測量調査を行った。本群を構成する5基の古墳は、すべて円筒埴輪を有することが知られており、時期的には川西編年Ⅲ期[12]に比定されている。

F群（第5図）は、E群の南西に位置し、前方後円墳3基、円墳14基で構成される。本群内においては、これまでに未指定円墳1基が調査されており、円筒埴輪が出土している[13]。また、現在、今回の整備事業に伴い、173号を調査中である。3基の前方後円墳の墳形はそれぞれ異なるが、いずれも前期の範疇に含まれると考えられる。

G群（第5図）は、F群の南東に位置し、前方後円墳1基、円墳11基で構成される。前方後円墳としたものは、現在、187号と190号と別々の番号を付されているが、本来同一の古墳であったものが道路によって分断されたものと考えられる。本群には調査された古墳は無いが、比較的規模の大きな円墳が多い。

H群（第6図）は、G群の南東の台地先端部付近に位置し、6基の円墳で構成される、3カ所に分かれて分布しており、かなり広範囲に及ぶが、便宜上1つの群とした。調査された古墳も無く、詳細は不明である。

I群（第6・7図）は、H群の東側の1段低い段丘面上に位置し、前方後円墳2基、円墳15基で構成される。本群に分布する高塚古墳の調査事例は無いが、平成12年度に西都市が行った市営住宅建設に伴う発掘調査により、消滅円墳の周溝2基とその周溝から竪坑が掘り込まれた地下式横穴墓が4基検出されている[14]。

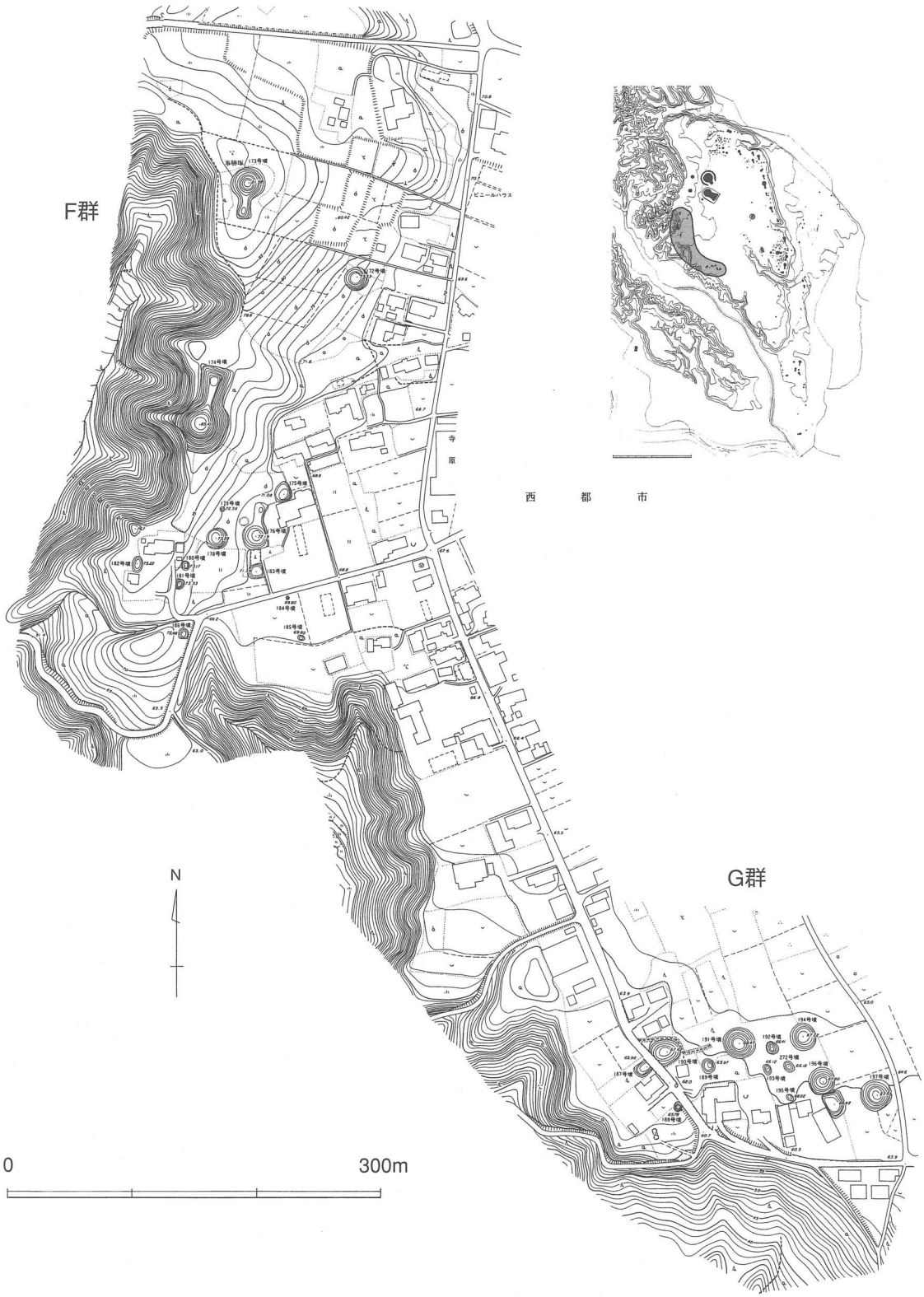
J群（第7図）は、I群と同一の段丘面上南側に位置し、前方後円墳4基、円墳13基から構成される。本群に分布する古墳にも調査例は無く、詳細不明である。

K群（第7図）は、J群の更に南に位置し、14群中唯一段丘下の沖積地に立地する。前方後円墳1基、円墳3基で構成され、調査事例が無いことから詳細不明である。

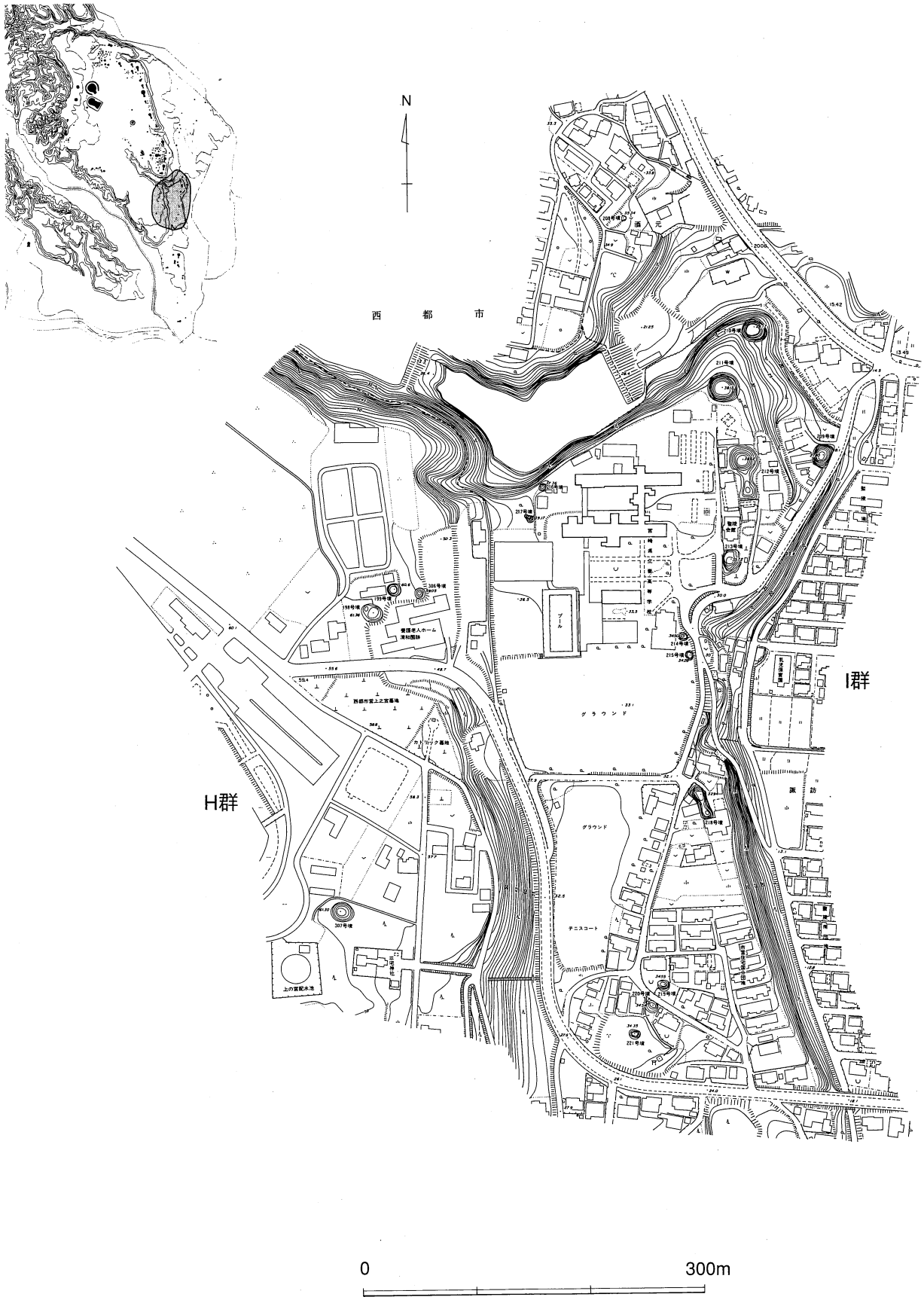
L群（第8図）は、A・B群の東に位置し、A・B群が分布する段丘高位の平坦面から30～40mほど低い段丘低位平坦面上に26基の円墳が分布する。分布範囲が広く、更に細分が可能であるが、立地的な特徴及び前方後円墳の分布も見られないことから、ここでは1つの小群として扱っておく。本群に分布する高塚古墳にも調査例は無いが、平成12年度に西都市が行った区画整理事業に伴う発掘調査によって、消滅円墳の周溝2基、地下式横穴墓21基が検出されている[15]。これ以前にも地下式横穴の発見があったようであり、周辺には更に多くの円墳や地下式横穴墓が存在する可能性が高い。また、上述した21基の地下式横穴の中には、竪坑が非常に長大なものがみられ、後述するM群で確認された酒元の上横穴墓群との関係を考える上で重要である。

M群（第4図）は、A群と谷を隔てて西に位置し、前方後円墳1基、円墳8基、横穴墓15基で構成される。本群周辺で1基の地下式横穴墓が検出されたようである[16]が、正確な位置は不明である。202（姫塚）・205・207号が大正年間に調査され、205・206号（鬼の窟）は今回の整備

第４図　A～E，M・N群（S=1／5000）

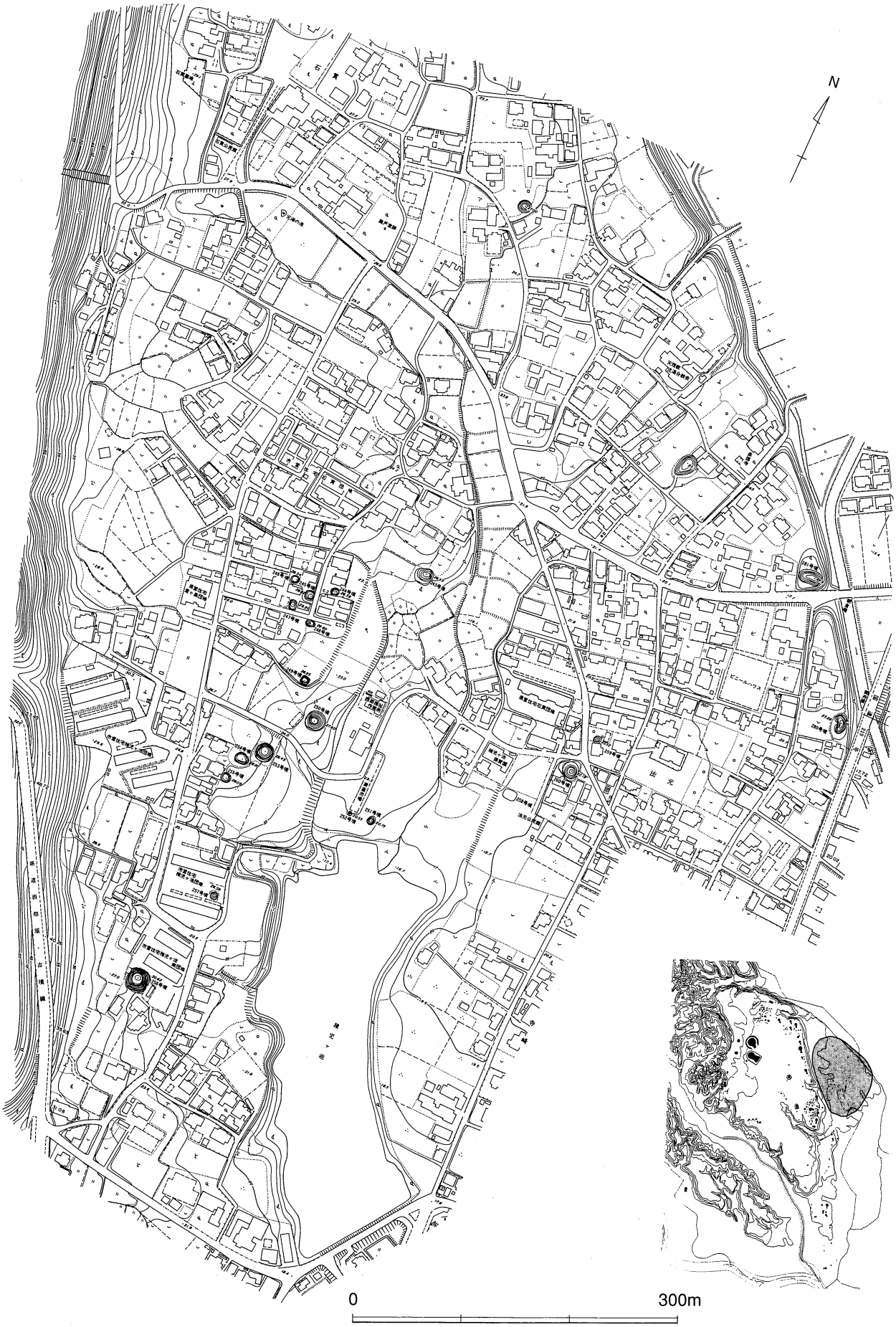


第５図　F・G群（S=1／5000）



第６図　Ｈ・Ｉ群（S=1／5000）

第７図　I・J・K群（S=1／5000）



第８図　L群（S=1／5000）

事業にともなって調査されている。鬼の窟古墳は、西都原古墳群最後の首長墓と位置付けられており、現在のところ本古墳群中唯一、主体部に横穴式石室が採用されている。また、平成6年度には本群内で西都市が実施したほ場整備事業に伴う発掘調査で、西都原では初めて横穴墓群の存在が明らかとなった[17]。この酒元の上横穴墓群にみられる横穴墓は、墓道のつきあたりもしくは側面に玄室を掘り込むもので、玄門の手前に不自然な浅い落ち込みを伴うものがあることから、地下式横穴墓との関連が指摘されている[18]。

N群（第4図）は、前述したD群の北側に位置し、前方後円墳1基、円墳34基で構成される。前方後円墳の265号（船塚）が大正年間に調査されているのみで、その他の円墳は未調査である。平成11年度に西都市教育委員会が実施した畑の天地返しに伴う発掘調査により、143号に隣接する消滅円墳の周溝が検出されている。また、近年実施された地下レーダー探査の結果などから、本群にも地下式横穴墓が分布する可能性が高い。

以上、各群毎に概要を述べたが、これまでに調査されているのは、全古墳の1割程度にすぎず、古墳群の全体像は未だ不透明である。現状では、前方後円墳の墳丘測量図をもとにした墳形研究が最も有効であり、積極的な築造過程の復元も試みられている[19]。

西都原古墳群では、前期段階にさほど規模に差のない複数の首長墓系譜が存在し、中期段階において畿内勢力との深いつながりが考えられる女狭穂塚・男狭穂塚が登場する。この段階で、西都原勢力は日向地方の広域的首長の座を確立したと考えられるが、その後、明確な首長墓が存在しない空白期を経て、姫塚・船塚の2基の前方後円墳が築造された後、鬼の窟、酒元の上横穴墓群の築造へと続く築造過程が想定される。この築造過程は、限られた情報から想定したものであり、未だ十分とはいえない過去の調査成果に関する再検討と、近年の調査成果を踏まえて、今後も慎重に検討していく必要がある。

第2表　西都原古墳群における各小群の古墳構成

小群名	高塚古墳				横穴墓	地下式横穴墓	備考
	総数	前方後円墳	円墳	方墳			
A	88	6	82	−			円墳は番号無し1を含む
B	12	6	6	−		7	
C	23	4	19	−		4	
D	51	0	52	−			
E	5	2	2	1			
F	17	3	14	−			円墳は消滅1（寺原古墳）を含む
G	12	1	11	−			187号と190号は前方後円墳1とした
H	6	0	6	−			2基は上宮古墳と呼ばれているもので、未指定
I	17	2	15	−		4	円墳は消滅2を含む
J	17	4	13	−			
K	4	1	3	−			
L	26	0	26	−		23	地下式横穴墓は堂ヶ島第2遺跡21とそれ以前の崩壊2を含む
M	10	1	9		15	1	円墳は消滅1、番号無し1を含む
N	35	1	34	−			円墳は消滅1を含む
合計	323	31	292	1	15	39	

第Ⅲ章　100号墳の調査

第１節　調査の概要

100号墳は、昭和40年代におこなった風土記の丘整備事業の対象地に立地しており、周辺の古墳とともに草木に覆われた美しい景観を呈していた。今回の調査は、それらの樹木整理等をおこなった後、平成10年度から平成12年度に及ぶ、都合３カ年に渡って実施した。

平成10年度

平成10年度には、次年度以降の発掘調査に備えて現況の墳丘測量（第９図）を行うとともに、墳丘全面からその周辺に及ぶ80×140ｍの範囲について地下レーダー探査を実施した。古墳の表面には、樹根が一部遺存している部分や抜根による凹凸が各所にみられ、傾斜変換線はあまり明瞭ではなかった。また、現況の墳端線は後円部の北東側が緩やかに張り出し、その他の墳端部分は周辺から垂直に近い角度で立ち上がる状況であったため、墳丘が削平を受けていることが懸念された。

測量調査の結果、100号墳とその周りを取り囲むように設けられた歩道の間には墳丘に沿ってやや窪んだ地形を示す等高線の状況がみられ、周溝の存在が予想された。更に、地下レーダー探査でも墳丘の周囲に前方後円形の周溝らしき反応がみられたことから、次年度以降の発掘調査による周溝確認への期待が高まった。墳丘上の地下レーダー探査では、後円部中央部付近の深さ1.8ｍ前後の地点で長さ５～６ｍ・幅２～３ｍ程度の主体部と考えられる反応がみられ、中心からやや北東に離れた地点でも石等の硬い物質と考えられる不自然な反応が確認されている。また、前方部墳頂平坦面にも主体部の可能性がある反応がみられた。

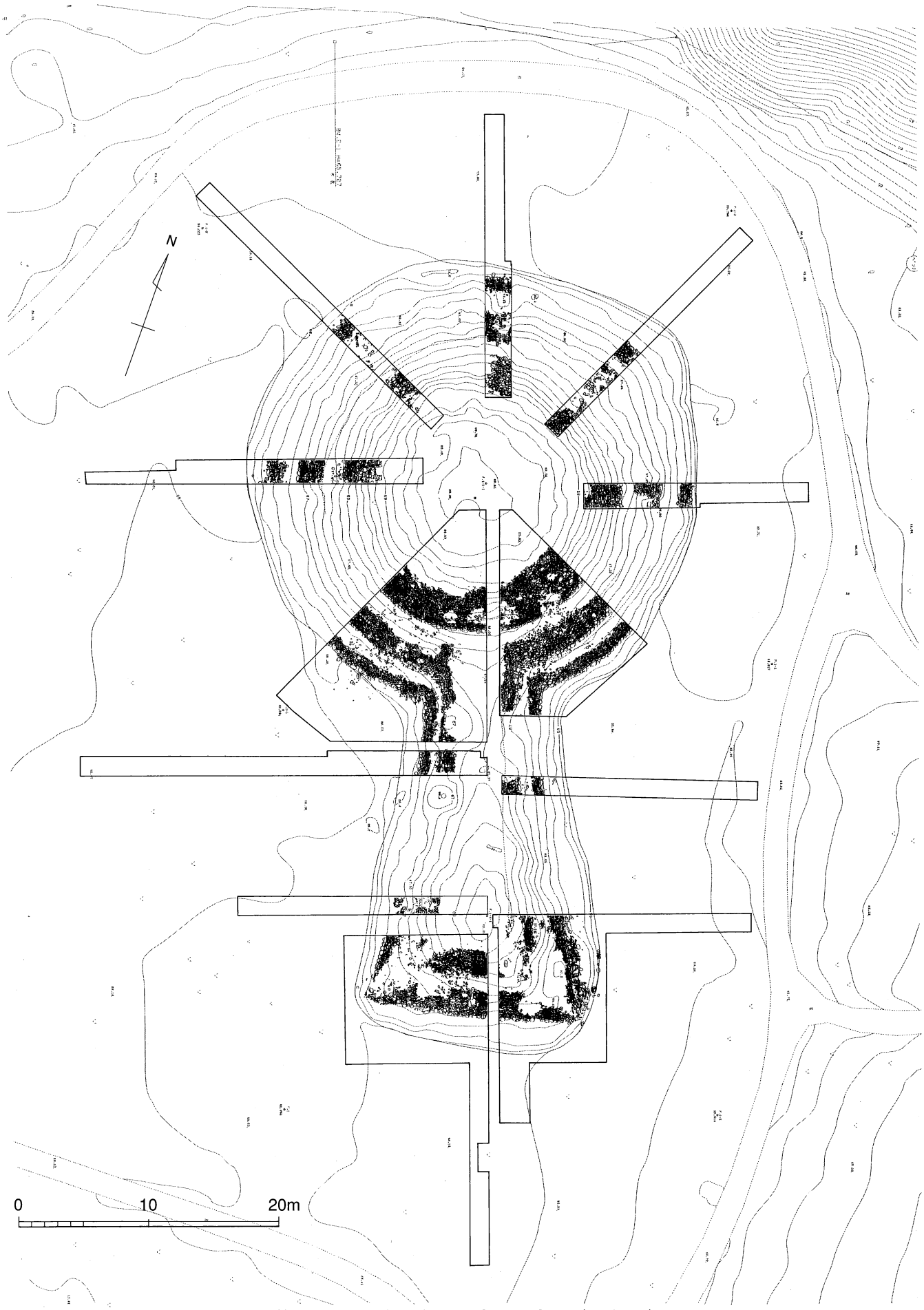
平成11年度

平成11年度には、前年度に作成した墳丘測量図をもとに後円部墳頂の中央付近と前方部墳頂の中心付近にポイントを設定し、その２点を通り墳丘を縦断する線を調査主軸として12カ所のトレンチを設定し、調査を開始した。その後、東西のくびれ部及び前方部両隅角を確認するためにトレンチを拡張して４カ所の調査区を設定し、周溝および墳丘の形状確認をおこなった（第10図）。この結果、後円部３段・前方部２段築成の前方後円墳である点や墳丘斜面部には葺石を有する点が確認された。周溝については不明瞭であったため、次年度以降の検証が必要となった。出土遺物としては、後円部墳頂平坦面西側肩部付近から焼成前底部穿孔の壺形土器底部が出土したほか、西側くびれ部墳端付近から土師器の壺や高坏等の細片が検出された。

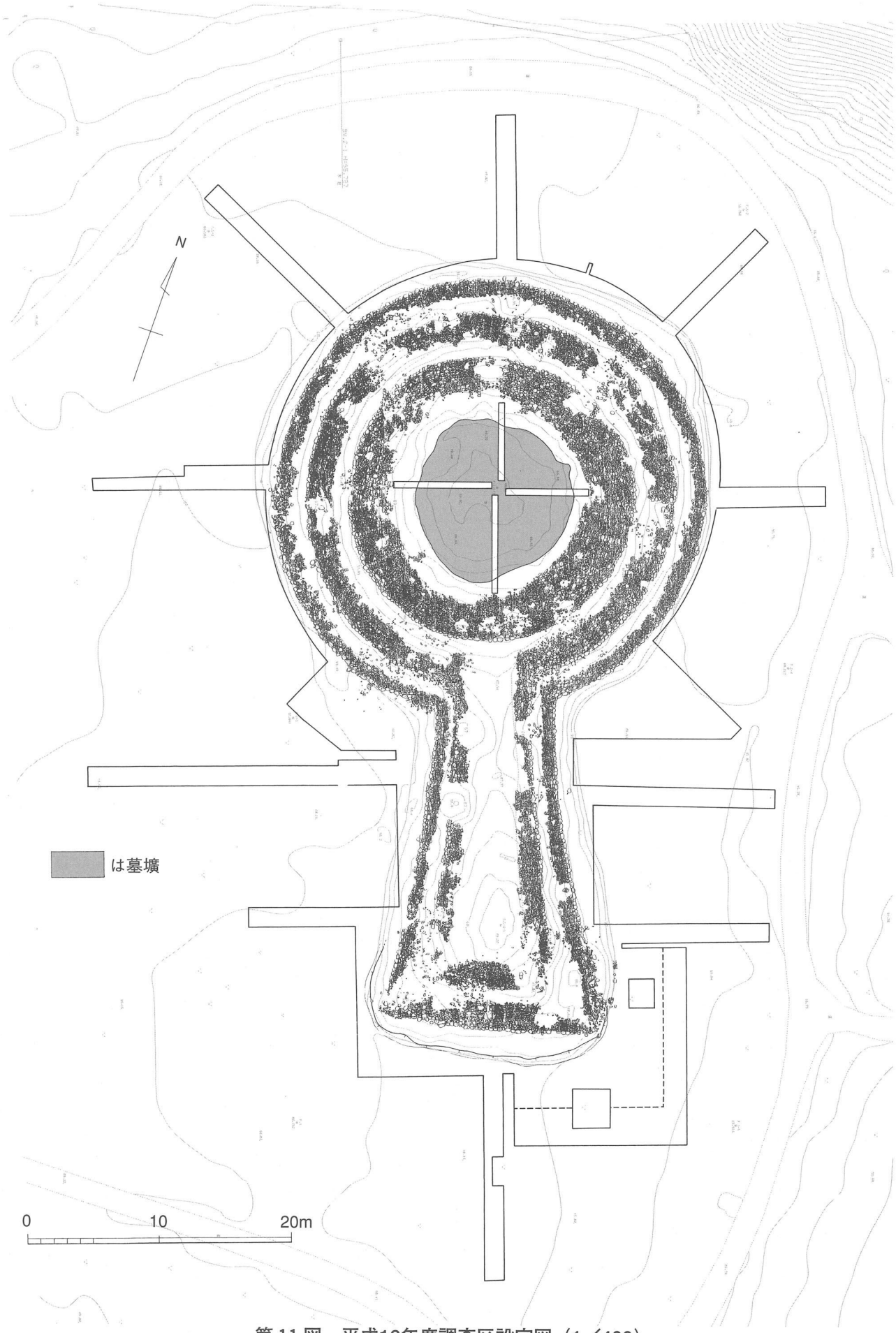
平成12年度

平成12年度には、前年度の調査区を拡張して墳丘全体を検出（第11図）し、写真測量によって葺石の図化をおこなった（付図）。周溝については、前年度のトレンチを拡張するなどして確認に努め、墳丘東側部分を中心としてその痕跡を確認した。また、後円部墳頂平坦面では、主軸方向及びその直交方向のトレンチを更に掘り下げて墳丘封土の状況を調査し、墓壙の平面プランを確認した。この墓壙の中央付近にあたる封土上面からは、やや浮いた状態で複数の高坏や壺などが検出された。

第９図　100号墳墳丘測量図（1／500）



第10図　平成11年度調査区設定図（1／400）



第11図　平成12年度調査区設定図（1／400）

第２節　墳丘の形状

第13図～第16図は、墳丘の土層断面図である。墳丘は20～80㎝程度の堆積土に覆われ、その下に封土や葺石が遺存していた。墳丘各段のテラス及び１段目根石列の外側においては、やや厚い堆積土がみられ、周溝が遺存すると考えられた部分では攪乱が著しい状況であった。しかし、１段目根石列から続く外側の地山面は、その上位の堆積状況から一部は古墳築造当時の成形面を残していると判断された。また、この地山面はほぼ平坦で、１段目の墳丘斜面の傾斜が根石を境として傾斜変換する状況が伺えることから、100号墳の墳端はこの根石列であると考えられる。

墳丘は全面的な検出により、ほぼその形状が明らかとなった。しかし、両隅角部分や各段斜面部の葺石上位は崩落が激しいため、テラスや墳頂平坦面の幅等は築造時よりも若干広がった状態で検出されていると考えられる。検出された墳丘の状況から後円部、くびれ部、前方部について、その形状的特徴を述べる。

後円部の形状

後円部は１段目斜面部、同テラス、２段目斜面部、同テラス、３段目斜面部、墳頂平坦面によって構成される３段築成の墳丘である。１・２段目のテラスはそれぞれ前方部１段目テラス及び前方部墳頂平坦面と不整合無く接続し、３段目のみ独立した円丘段状を呈する。

１段目の根石列はやや歪んだ円形に並び、調査主軸に直交する断面（第13図Ａ－Ｗ、第14図Ａ－Ｅ）で、その径は32.4ｍを計る。斜面部は約30°の角度で立ち上がり、その平面的な幅は残りの良い部分の状況から1.5ｍ前後になると考えられる。この場合、１段目斜面上端と２段目根石列の間にある１段目テラスの幅は80㎝前後となる。

２段目の根石列はほぼ円形に並び、調査主軸に直交する断面で（第13図Ａ－Ｗ、第14図Ａ－Ｅ）で、その径は28ｍを計る。斜面部は約25°の角度で立ち上がり、その平面的な幅は残りの良い部分の状況から2.2ｍ前後になると考えられる。この場合、２段目斜面上端と３段目根石列の間にある２段目テラスの幅は、１段目と同じく80㎝前後となる。

３段目の根石列もほぼ円形に並び、調査主軸に直交する断面で、その径は21.6ｍを計る。斜面部は約25°の角度で立ち上がり、斜面部の平面的な幅は残りの良い部分の状況から3.8ｍ前後になると考えられる。この場合、墳頂平坦面はその径が約13.5ｍとなる。

くびれ部の形状

くびれ部は、西側２段目以外に明瞭な区画石がみられ、比較的直線的なコーナーを描いて前方部に接続する。根石列の平面的な角度は、東側１段目で約120°、２段目で約105°、西側１段目で約105°、約２段目で約120°である。くびれ部コーナーの立ち上がり角度は、断面図を作成していないため、正確には不明だが、平面図の状況から東側１段目で約41°、東側２段目で約35°、西側１段目で約47°、２段目で約30°を計る。平面的な印象として、くびれ部は左右対称ではなく、東側のくびれ部がやや後円部側に寄っている感がある。

前方部の形状

前方部は１段目斜面部（側面・前面）、同隅角、同テラス、２段目斜面部（側面・前面）、同隅角、墳頂平坦面によって構成される２段築成の墳丘である。１段目テラス及び墳頂平坦面は後円部１段目テラス及び２段目テラスとくびれ部において不整合無く接続する。

前方部側面根石列のくびれ部から隅角までの長さは、１段目東側で26ｍ、西側で24ｍ、２段目東側で24.5ｍ、西側で23ｍと推定され、ともに東側が長い。このため、東西の隅角を結ぶ前端の根石列は墳丘主軸に対して東側が南下がりに傾いており、その長さは１段目で17.3ｍ、２段目で10ｍと推定される。前方部側面斜面部の平面的な幅は残りの良い部分の状況から１段目で1.2～1.8ｍ、２段目で１～２ｍと推定され、立ち上がりの角度は１段目で約30°２段目で約25°前後である。前端斜面部の平面的な幅は、１段目で2.4ｍ、２段目で2.2ｍと推定され、立ち上がり角度は１段目で25°、２段目で25°前後である。隅角については葺石をほぼ完全に失っていることから不明瞭だが、側面及び全面の状況から、その立ち上がり角度は１段目で20°、２段目で30°と推定される。１段目斜面部側面上端と２段目側面根石列の間にあるテラスの幅は50～80㎝、前面で幅80㎝前後になると推定される。前方部墳頂平坦面の長さは、東側で24ｍ、西側で23ｍ、幅はくびれ部で４ｍ、前面で5.5ｍと推定される。また、この平坦面は第16図で明らかなように、２段目斜面部前面付近が最も高く、後円部方向へ緩やかに下降した後、若干上昇気味に傾斜変換してくびれ部へ向かう断面形を呈する。

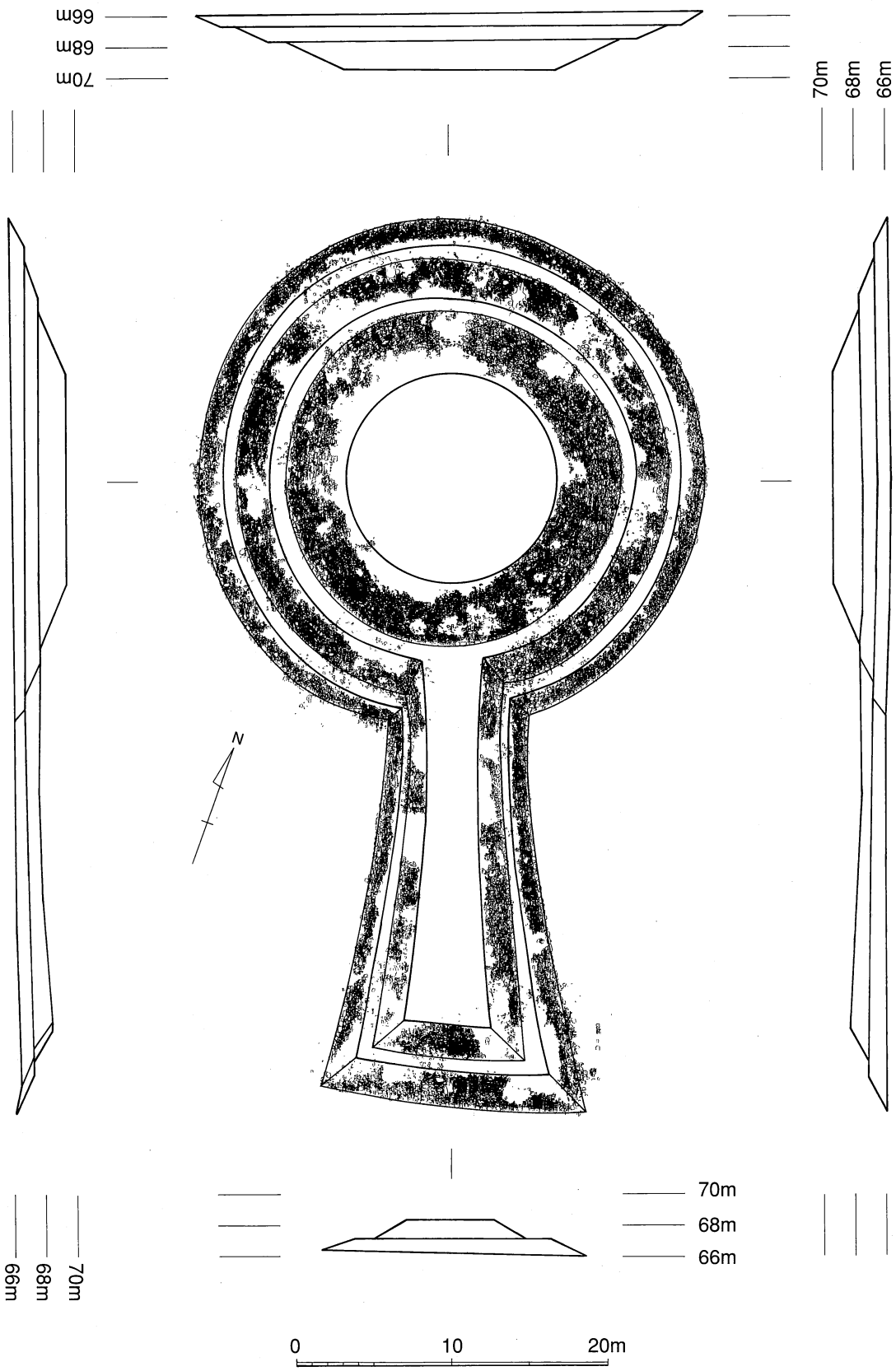
墳丘の復元

前述のように、後円部、くびれ部、前方部の特徴を述べてきたが、各部において調査結果に基づいて推定される復元値は下表のとおりである。第12図はこの数値を参考として墳丘復元を試みたものであるが、現況に即して復元しているため、部分的には歪んでいる。

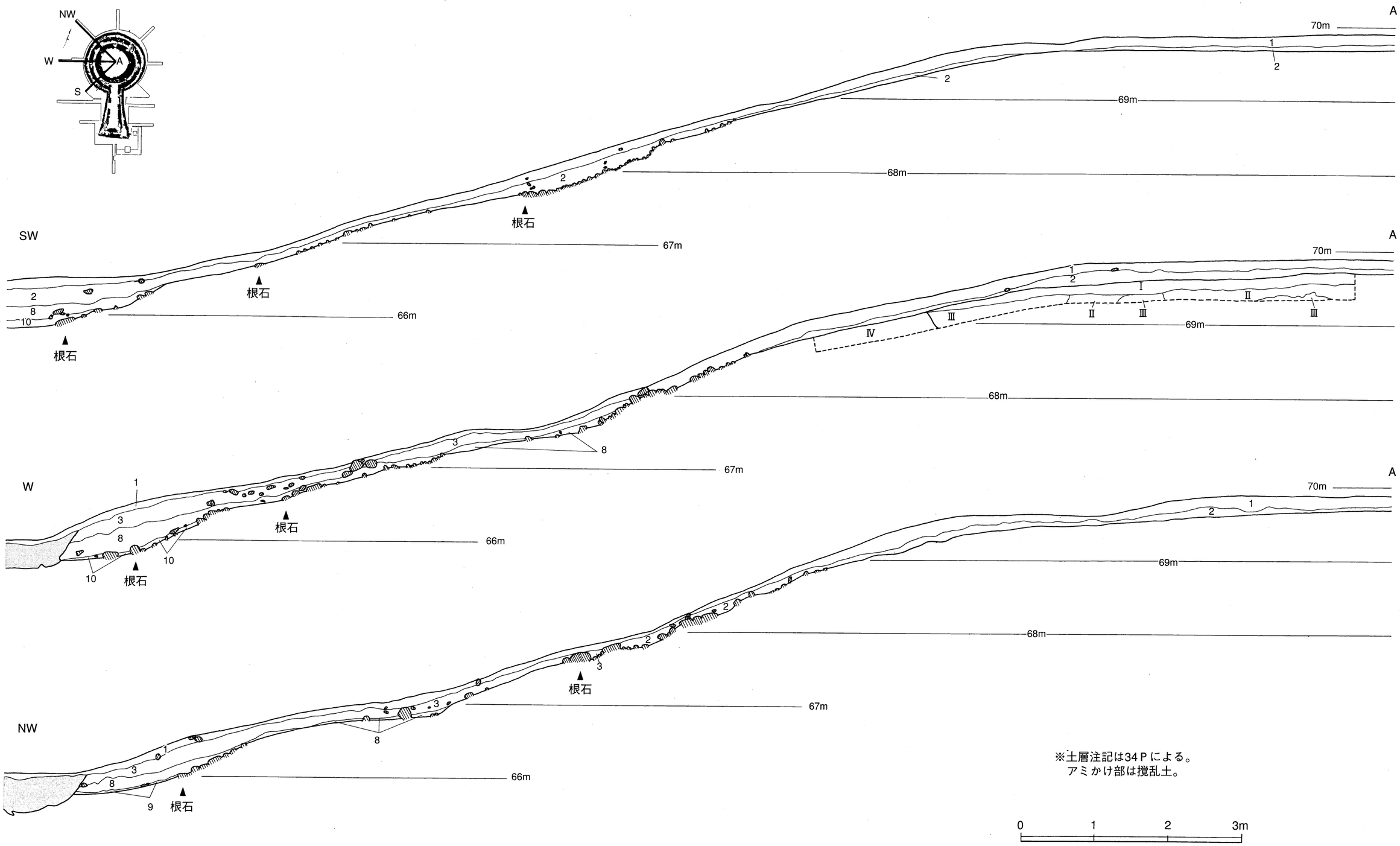
第３表　　西都原100号墳墳丘各部復元規模一覧

後円部	１段目	斜面部	最大径	32.4m
			幅	1.5m
			高さ	0.7～0.9m
		テラス	幅	0.8m
	２段目	斜面部	最大径	28.0m
			幅	2.2m
			高さ	0.9～1.0m
		テラス	幅	0.8m
	３段目	斜面部	最大径	21.6m
			幅	3.8m
			高さ	1.8～2.0m
		墳頂平坦面	径	13.5m
くびれ部	１段目	斜面部	基底幅	9.0m
			上端幅	7.0m
	２段目	斜面部	基底幅	6.5m
			上端幅	4.0m

前方部	１段目	斜面部	側面	長さ	東26.0m、西24.0m
				幅	1.2m～1.8m
				高さ	0.8m
			前面	長さ	17.3m
				幅	2.4m
				高さ	2.4m
		テラス	側面	幅	0.5～0.8m
			前面	幅	0.8m
	３段目	斜面部	側面	長さ	東24.5m、西23.0m
				幅	1.0～2.0m
				高さ	21.6m
			前面	長さ	1.0m
				幅	2.2m
				高さ	0.8～1.1m
		墳頂平坦面		長さ	東24.0m、西23.0m
				幅	3.5m～5.5m

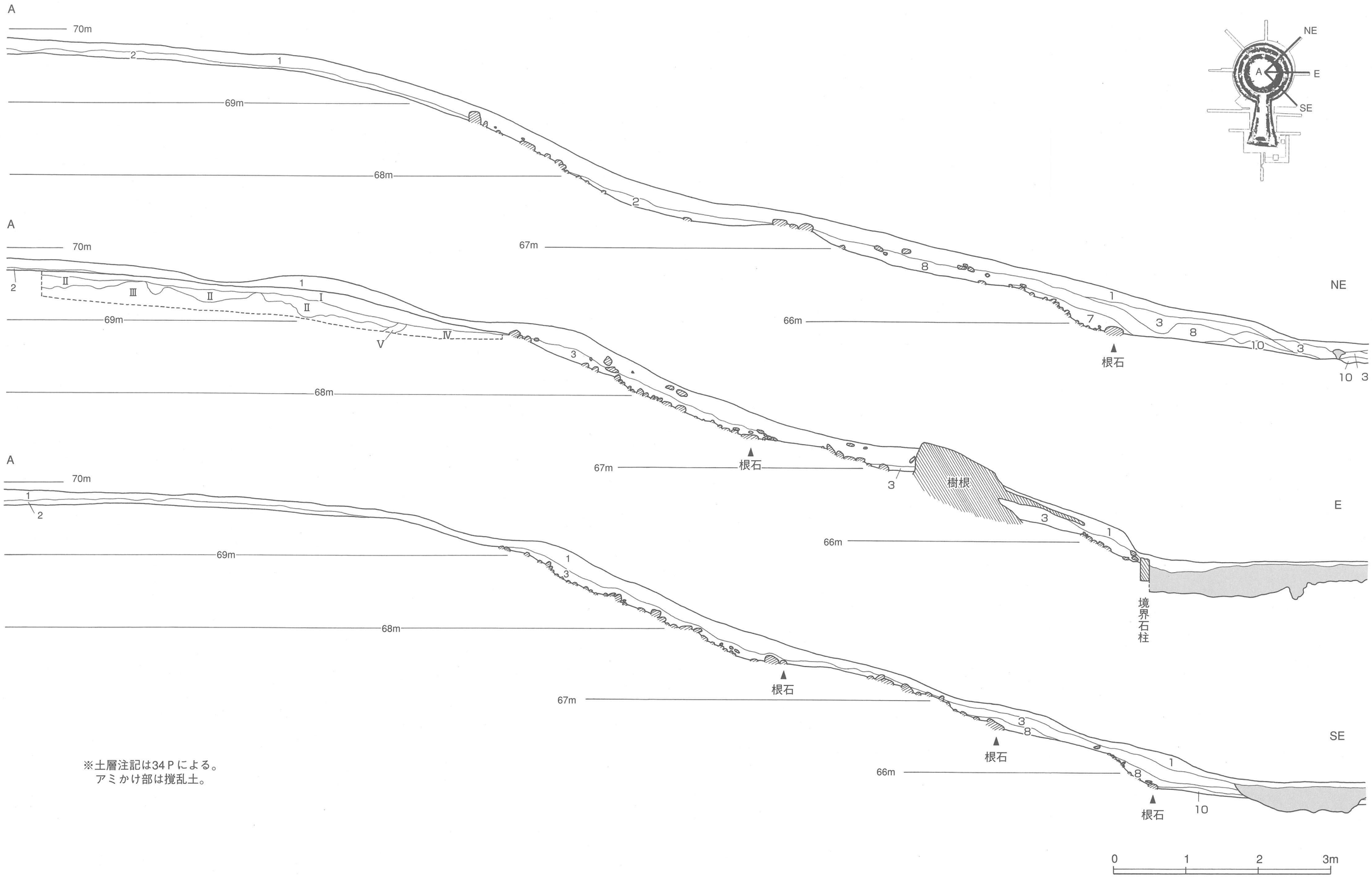


第12図　西都原100号墳墳丘復元図（案）

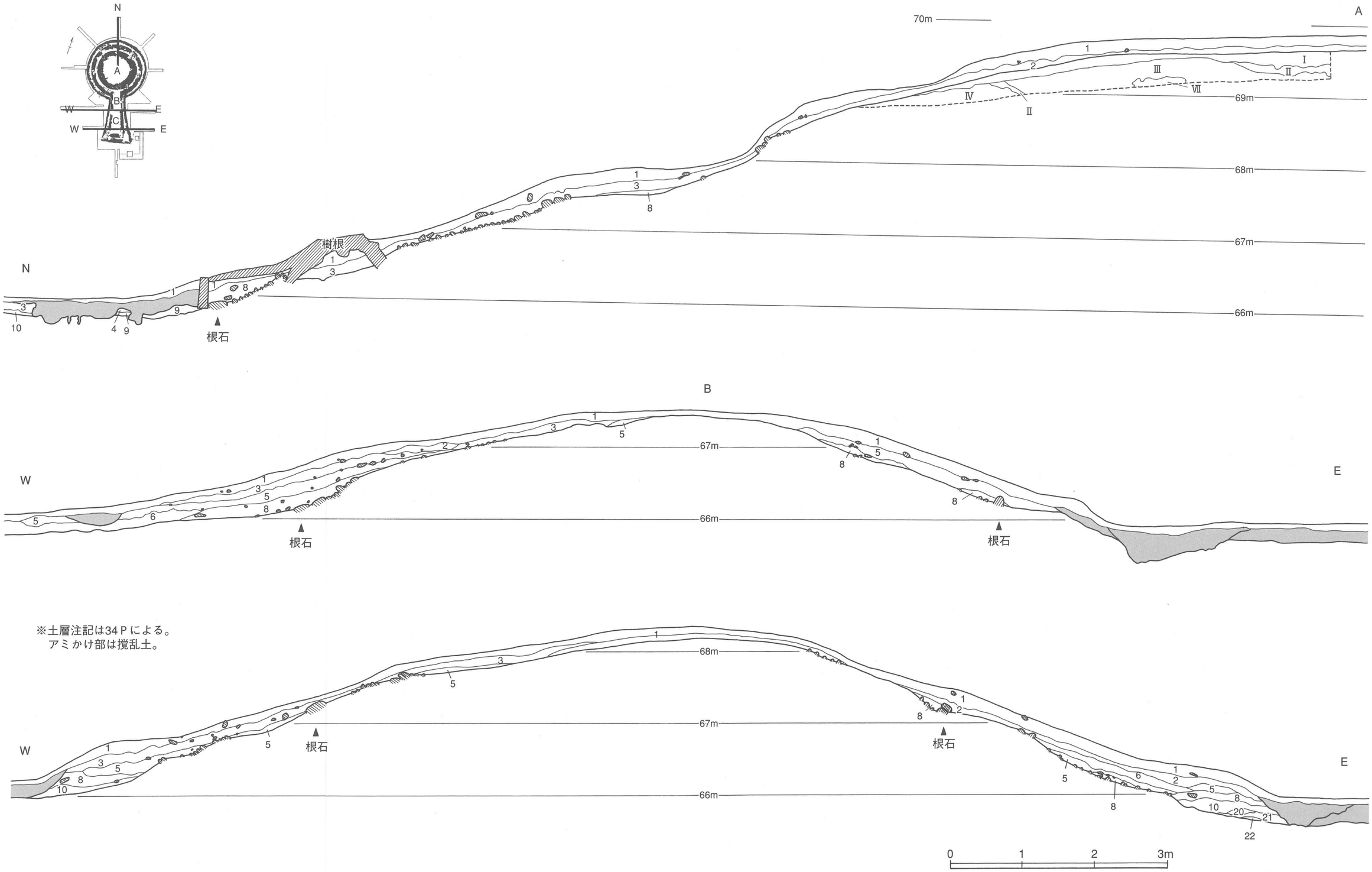


※土層注記は34Pによる。
アミかけ部は撹乱土。

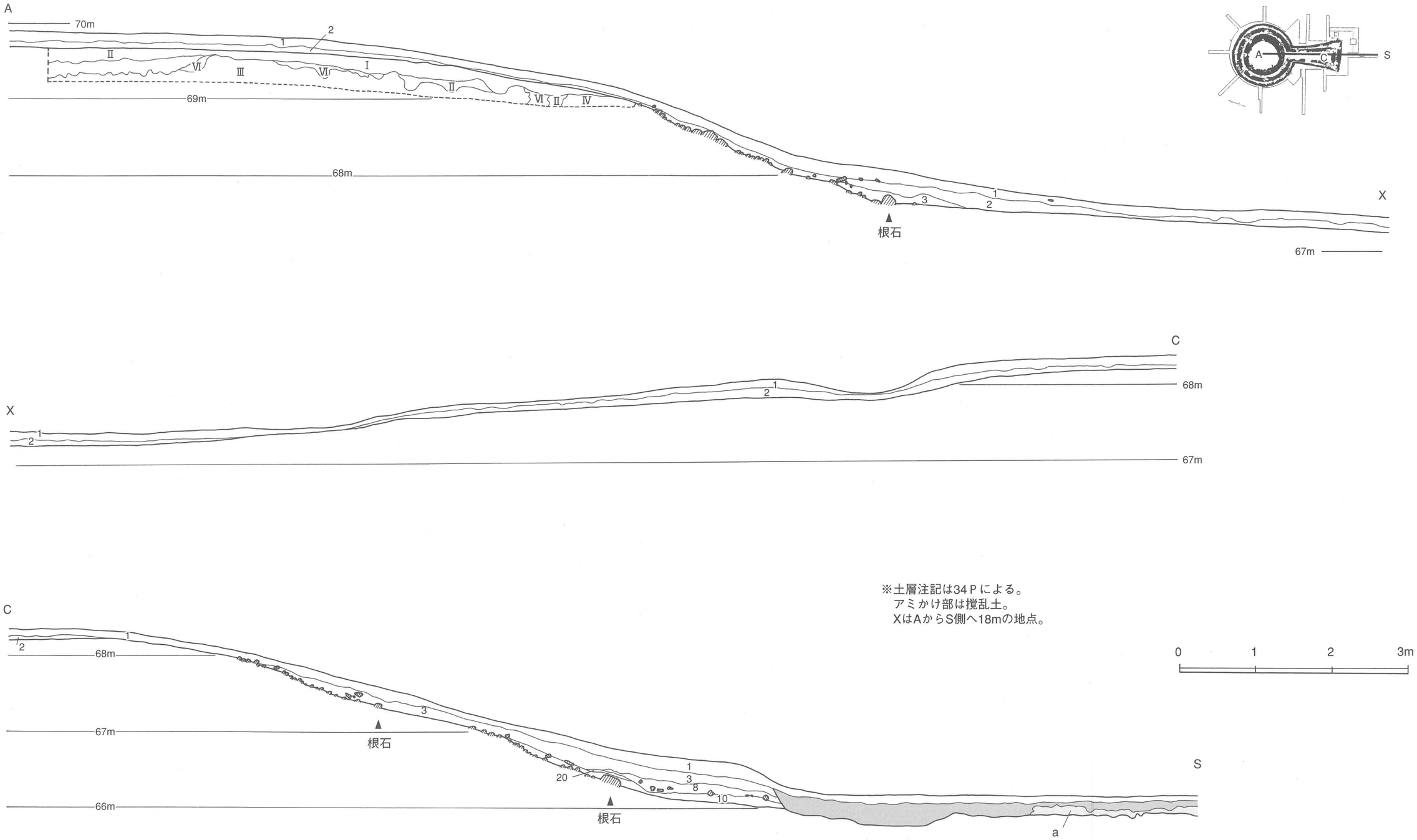
第13図　墳丘断面図①（A–SW，A–W，A–NW）



第14図　墳丘断面図②（A–NE，A–E，A–SE）



第15図　墳丘断面図③（A–N, W–B–E, W–C–E）



第16図　墳丘断面図④（A–C–S）

第3節　葺石

葺石は墳丘斜面部全面から検出され、西都原13号墳で確認された小円礫によるテラス上の貼石は認められなかった[20]。葺石に使用されている礫は、最大長が10㎝に満たないものから50㎝を超えるものがみられ、大半は角のとれた川原石状の砂岩である。その供給地は、西都原台地の東約2㎞を流れる一ツ瀬川の河原と推定される。葺石が遺存する部分については、その断面調査を行っていないため確証はないが、おそらく1層からなるものと考えられる。

前節で述べたように、前方部・後円部ともに各段の斜面部端には最大長20～50㎝程度の比較的大きな礫を用いた根石が1列（部分的に2列）みられた。この根石列は若干欠ける部分はあるものの、1・2段目は前方後円形に、後円部3段目は円形に廻っており、このことから墳丘の段築構造が明確となった。また、この根石は礫の長軸方向を墳丘に平行させ、斜面部から1段外側の位置に置くことにより、斜面部葺石の加重を支えられるような配置の工夫が見受けられる。

斜面部の葺石には部分的に大きさのばらつきがあり、中には根石よりも大きなものさえある。基本的には墳丘斜面に直交するように葺かれているが、中には前方部前面1段目の中央付近にみられるような大きな礫を縦置きにするといった例外もある。また、斜面部の葺石には20～30㎝程の比較的大きさの揃った円礫による区画の存在が見受けられる。この区画は、葺石が欠落している部分もあるため完全には把握できないが、近接する部分においてはその間隔が比較的揃っている印象を受ける。第19図は前方部東側中央付近の葺石であるが、ここでは1m前後の間隔で区画の境界石列が並んでいる状況が明瞭である。後円部においても遺存状況が良好な部分では同様の間隔で区画石列が廻っていることから、この間隔にはある程度の規格性が感じられる。このほかにも、部分的にやや大きな礫が集中的に葺かれている部分、横方向に並ぶ部分があることから、横方向の区画が存在する可能性もあるが、確実には判断できない。

くびれ部付近の葺石（第17図）では、東側にやや大きな礫が多用されており、東西1段目及び東2段目にはそのコーナーに境界区画石列がみられる。

前方部隅角付近の葺石（第18図）は1段目・2段目ともに残念ながら遺存状況が悪く、コーナー稜線上に区画境界石が存在したのか不明である。

第4節　周溝

周溝については前節で述べたように、発掘調査以前に行った墳丘測量や地下レーダー探査の結果から、その存在は確実であると考えられていた。また、平成12年度に刊行した100号墳の概要報告では、周溝の範囲を明示して報告しているが、本報告に際して再検討したところ、大部分はその範囲を明確にし得ないと判断された。

第20～22図は第13～15図に示した墳丘断面の各1段目根石列付近から墳丘外側にかけての堆積状況である。各断面図をみると、全てにおいて墳端もしくは墳端からある程度離れた地点より激しく攪乱の影響を受けていることがわかる。周溝の外側の立ち上がりが遺存していると判断された

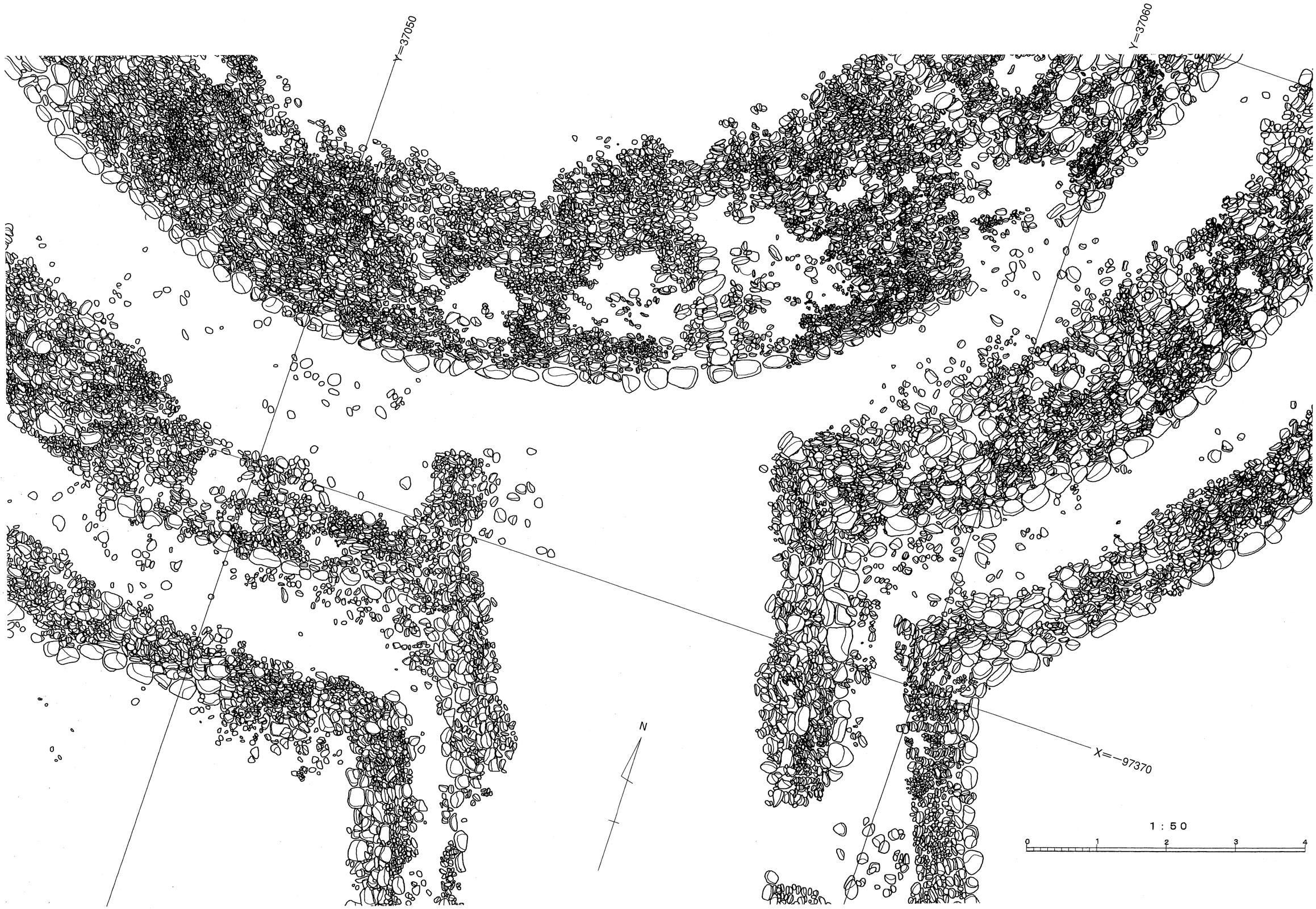
ものは、A－NE断面のみである。A－NE断面では、根石の外側の地山面が緩やかに下方へ下り、4.5m地点で古墳築造以前の遺構を切る周溝の立ち上がりが確認できる。これ以外の断面では、攪乱の影響が浅い部分において、わずかに攪乱と地山の間に周溝の堆積土と考えられる土がみられるものの、外側の立ち上がりは不明である。

墳丘の外側にみられた攪乱は、石製標柱を樹立するための布堀状の掘削を除いて深さがほぼ一定であり、本来の堆積土が攪拌されたような状況である。この攪乱の中にみられたa層（第16図、第21～22図の濃い網掛け部）は地山の割合が非常に高い攪乱土であり、攪拌を受ける以前は地山の堆積がそこに遺存していたと判断される。さらに、いずれの断面でも墳端からある程度離れた地点でしかa層は確認されていないことから、周溝が存在していた可能性は極めて高いと考えられる。前述した概要報告に示された周溝の範囲はこのa層が確認される付近を周溝の立ち上がりと認定したものであり、ある程度本来の周溝範囲に近いものである可能性が高い。

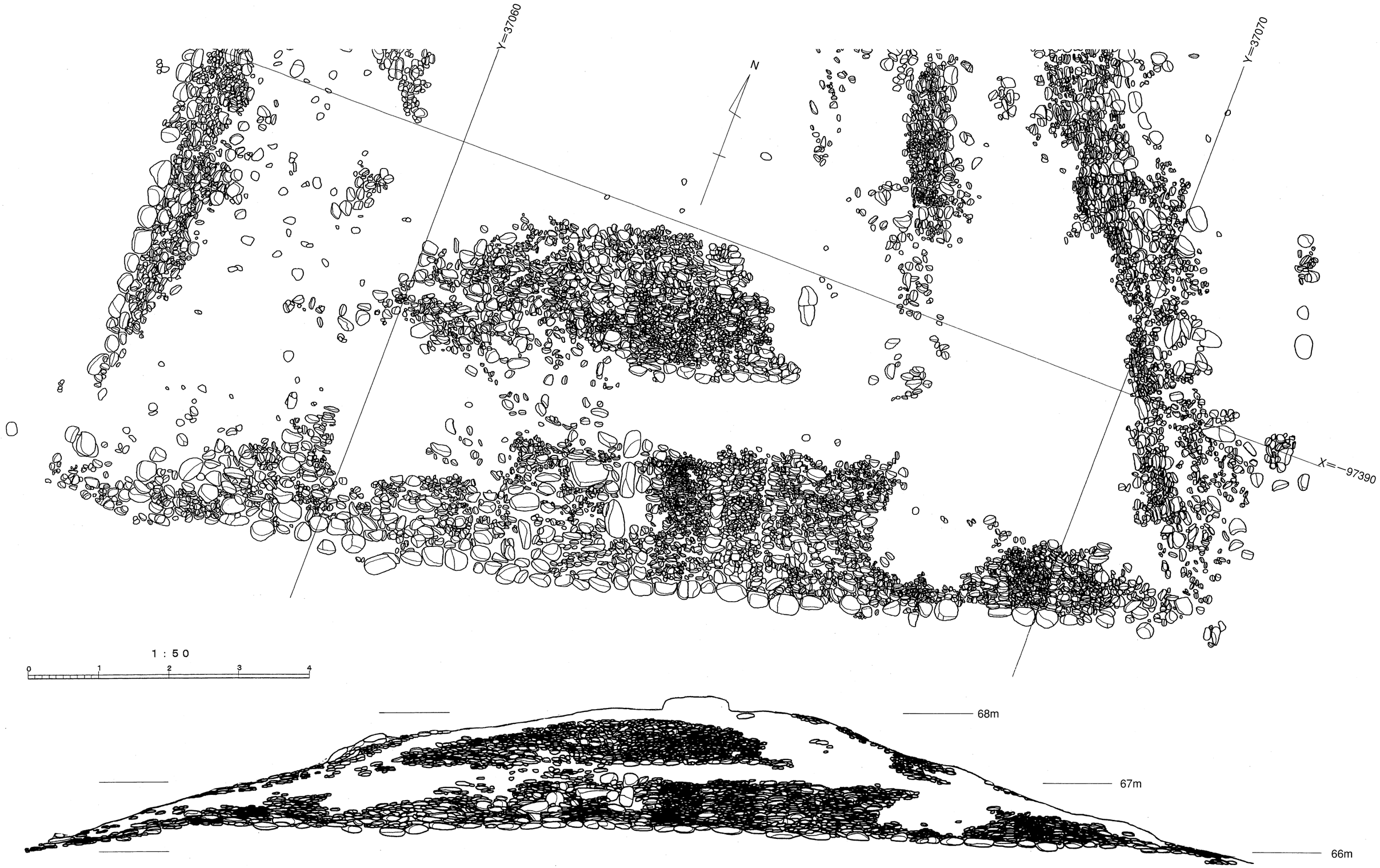
以上のように、周溝の存在はほぼ確実であると考えられるが、その範囲については不明である。前述の攪乱土の解釈を前提とすれば、後円部はほぼ全周する可能性が高い。また、前方部については、墳丘東側の状況からある程度前方部側へと周溝が延びる可能性が考えられるものの、東側隅角部付近では石製標柱を樹立するための布堀状の掘削のすぐ外側でアカホヤ火山灰（もしくはa層）が検出されていることから、前方部前面には周溝が廻らない可能性がある。

第13～16図、20～22図土層注記

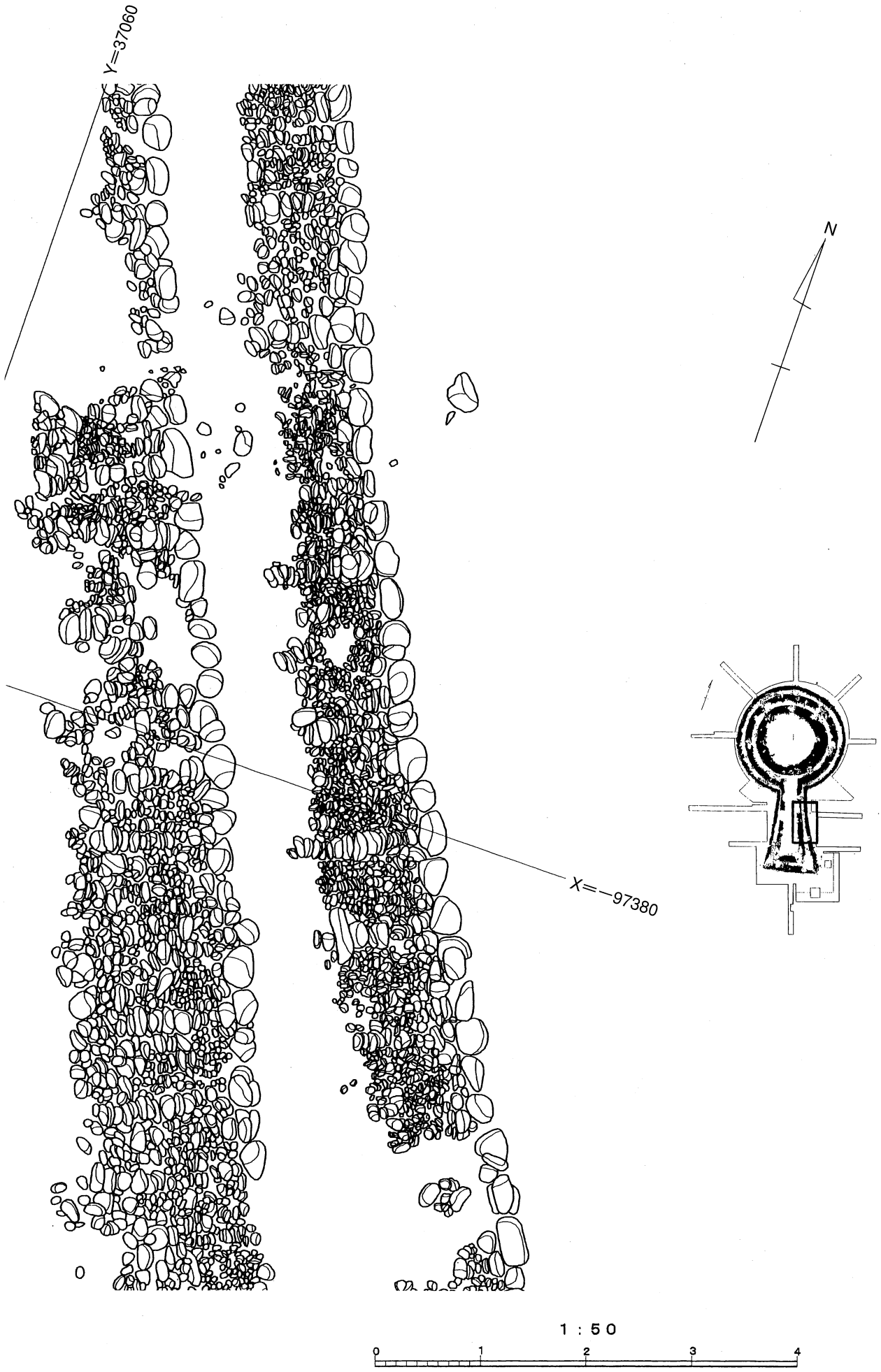
1	黒色土	(10YR7/1)	表土。草根が密にみられ、しまりがない。
2	黒褐色土	(10YR2/2)	若干しまりあり。
3	黒色土	(10YR2/1)	若干しまりあり。
4	２と３の混合土		
5	黒褐色土	(10YR3/2)	アカホヤ火山灰の粒を多く含み、しまりがない。
6	黒褐色土	(10YR2/2)	アカホヤ火山灰の粒を多く含み、しまりがない。
7	黒褐色土	(7.5YR3/1)	しまりがない。
8	黒色土	(10YR2/1)	しまりがない。
9	暗褐色土	(10YR3/3)	1㎜大のアカホヤ火山灰粒を少量含む
10	黒褐色土	(7.5YR3/2)	1㎜大のアカホヤ火山灰粒を多く含む
11	黒褐色土	(10YR2/2)	やや粘性を帯びる。
12	黒褐色土	(10YR2/2)	黄褐色土（10YR4/3）の粒を少量含み、しまりがない。
13	黒色土	(10YR2/1)	粘性を帯びる。
14	黒褐色土	(10YR3/1)	1㎜大のアカホヤ火山灰粒を多く含み、若干しまりあり。
15	黒褐色土	(10YR2/2)	粘性を帯び、若干しまりあり。
16	黒褐色土	(10YR3/2)	やや粘性を帯び、1～2㎜大のアカホヤ火山灰粒をわずかに含む。
17	黒色土	(10YR3/1)	2～3㎜大のアカホヤ火山灰粒子を多く含む
18	黒色土	(10YR2/1)	やや粘性を帯び、1㎜大のアカホヤ火山灰粒子をわずかに含む。若干しまりあり。
19	黒褐色土	(10YR2/2)	やや粘性を帯び、若干しまりあり。
20	黒色土	(10YR2/1)	アカホヤ火山灰粒を非常に多く含む。
21	黒色土	(10YR2/2)	黒色土（本来アカホヤ火山灰直下の堆積層）ブロックを含む
22	黒色土	(10YR2/2)	黒色土（本来アカホヤ火山灰直下の堆積層）ブロックを多く含む
Ⅰ	黒褐色土	(10YR3/2)	1㎜大のアカホヤ火山灰粒を多く含み、しまりがない。
Ⅱ	黒褐色土	(10YR3/2)	3～10㎝大のアカホヤ火山灰ブロックを多く含み、しまりがない。
Ⅲ	黒色土	(10YR2/1)	1㎜以下のアカホヤ火山灰粒をわずかに含み、若干しまりあり。
Ⅳ	黒褐色土	(10YR2/2)	1㎜以下のアカホヤ火山灰粒を密に含み、若干しまりあり。
Ⅴ	黒褐色土	(10YR2/2)	2㎝大のアカホヤ火山灰ブロックを密に含む。
Ⅵ	黒褐色土	(10YR2/2)	3～10㎝大のアカホヤ火山灰ブロックを含む。
Ⅶ	黒色土	(10YR2/1)	1㎝大のアカホヤ火山灰粒を多く含み、若干しまりあり。



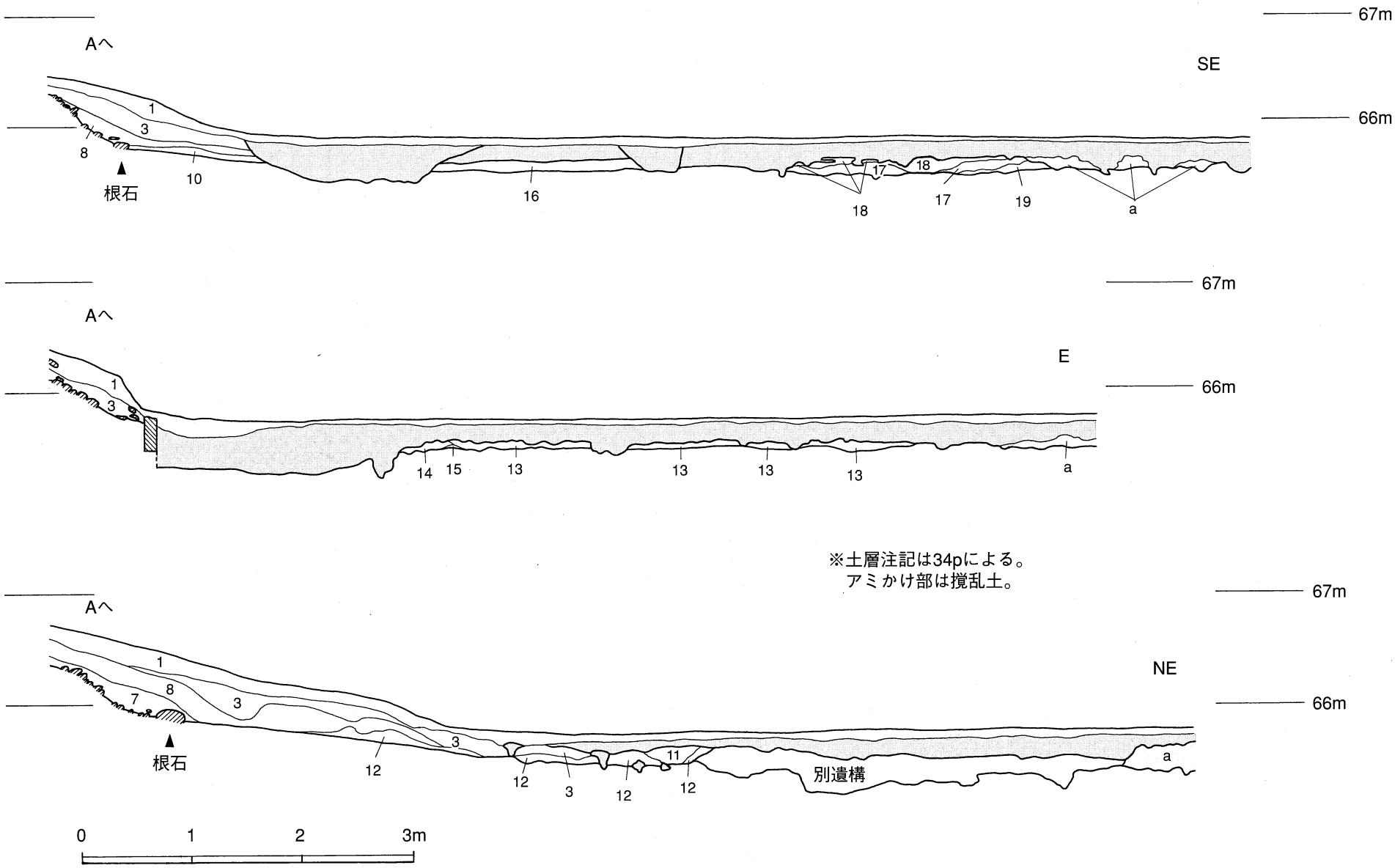
第17図　くびれ部周辺葺石検出状況（1／50）



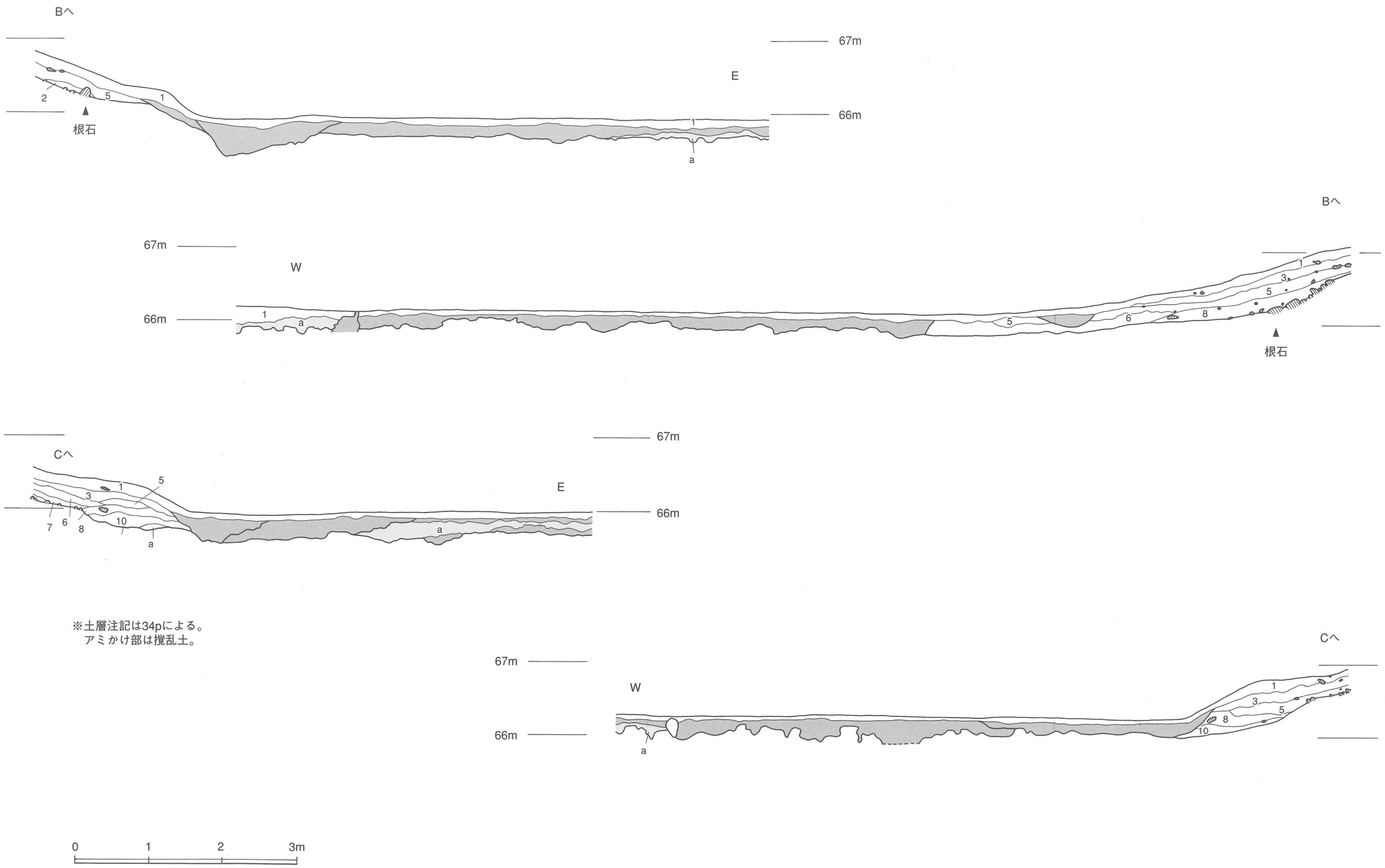
第18図　前方部前端葺石検出状況（1／50）



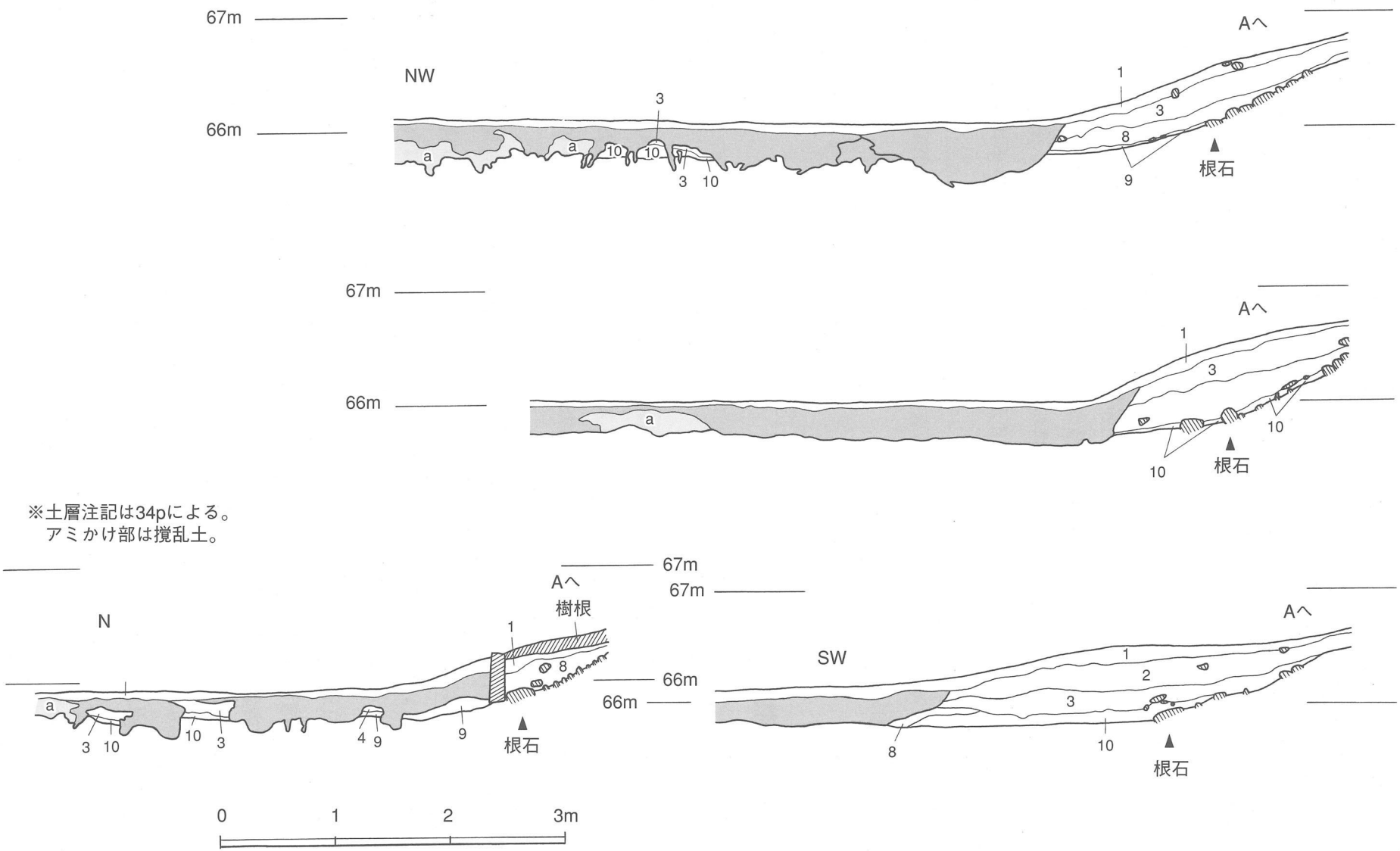
第19図　前方部東側葺石検出状況（1／50）



第 20 図　墳端～周溝付近断面図①（A—SE, A—E, A—NE）



第21図　墳端～周溝付近断面図②（B–E, B–W, C–E, C–W）



第 22 図　墳端～周溝付近断面図③（A–NW, A–W, A–N, A–SW）

第5節　墓壙

現況墳丘を20～40㎝程度掘り下げると、後円部墳頂平坦面中央部にアカホヤ等のブロックを多く含む土が直径約11.5ｍ程の円形に検出された。そこで、主軸及びその直交方向にトレンチを設定し、その堆積状況を確認したところ、この土はアカホヤ火山灰の混入度合いが若干異なる層を成して墳丘封土下へと続いており、これが墓壙の埋土であると判断された。しかし、古墳の保護上の問題から、それ以上下位についての確認は行わなかったため、墓壙の規模及び主体部については不明である。ただし、前述したように、発掘調査以前に実施した地下レーダー探査では、深さ1.8ｍ前後の地点で長さ5～6ｍ・幅2～3ｍ程度の主体部と考えられる反応がみられ、中心からやや北東に離れた地点でも石等の硬い物質と考えられる不自然な反応が確認されている。後者については不確実だが、西都原13号墳で墓壙壁面の一部に礫が葺かれた？様な部分があり、それに類似したものである可能性も考えられる[21]。

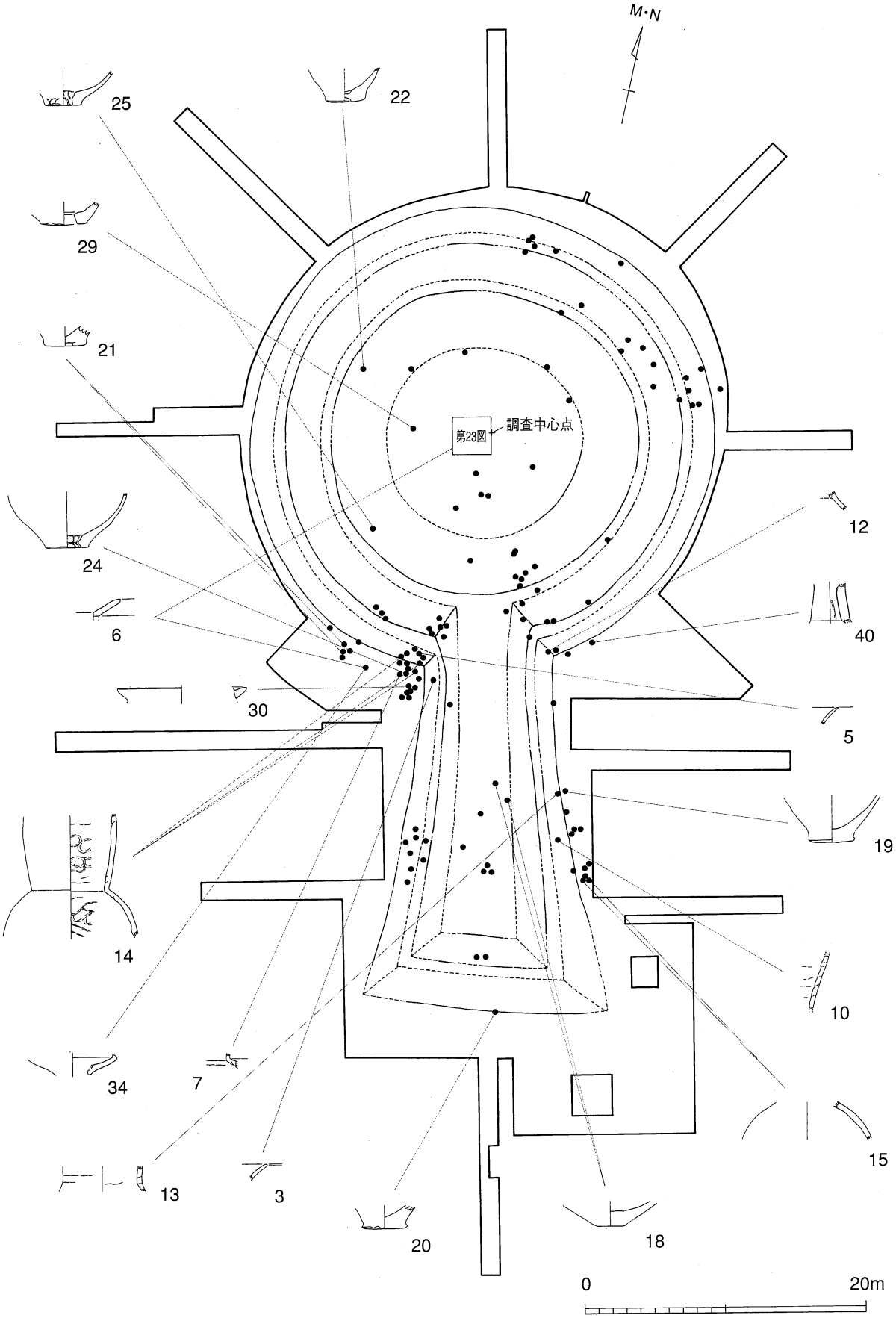
地下レーダー探査では前方部でも主体部らしき反応を確認していたが、前方部墳頂平坦面においては墓壙等の痕跡は確認されなかった。

第6節　出土遺物

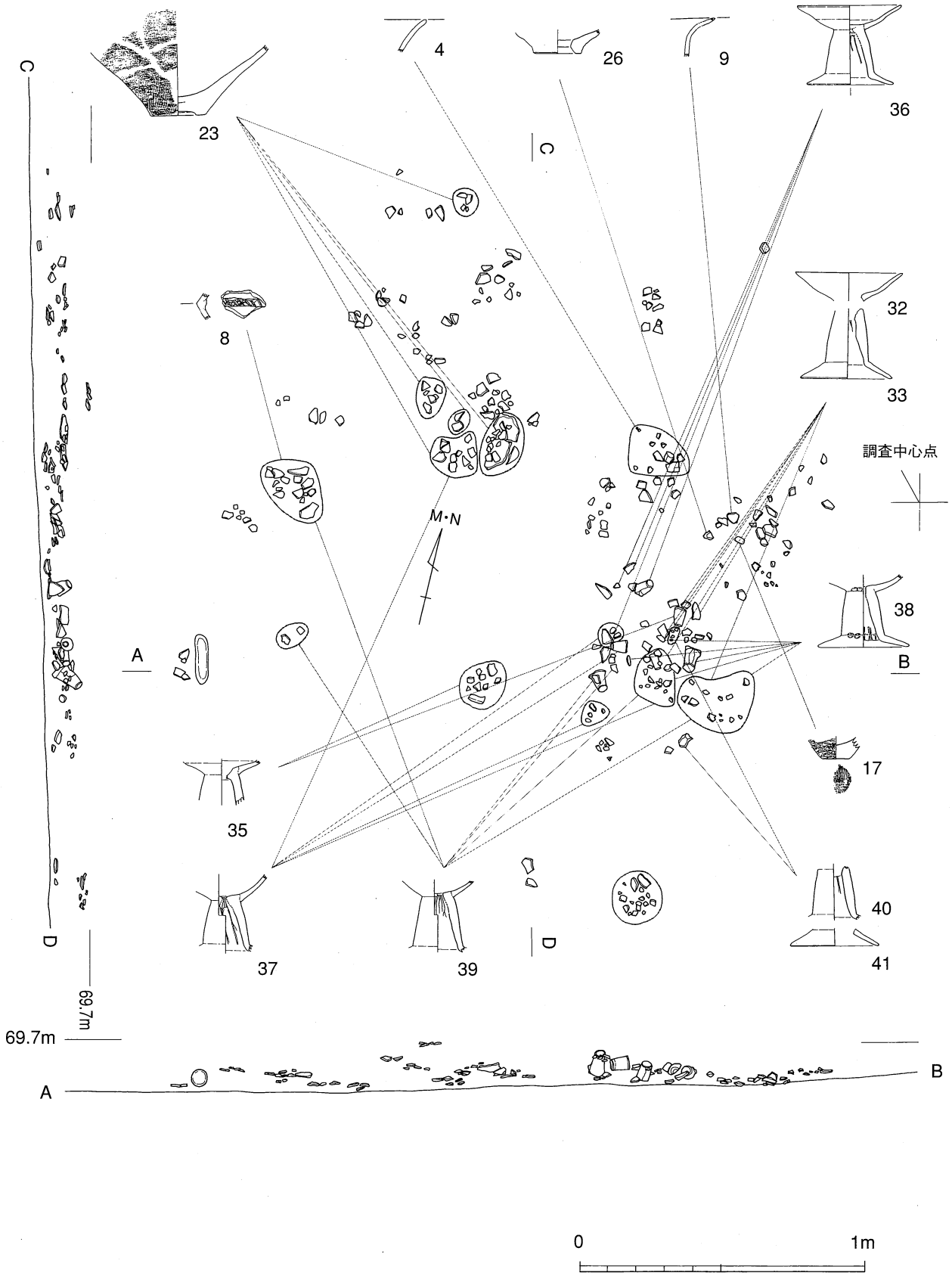
1　遺物出土状況

今回の調査で出土した遺物は、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、石器、鉄器の約600点程である。これらの内、須恵器は表土からの出土、縄文土器、弥生土器、石器、鉄器は、墳丘封土に含まれていたものが墳丘崩壊に伴う流土中に混入したものと考えられたため、本報告では鉄器以外は図化していない。

100号墳に伴うとみられる遺物は全て土師器で、古墳築造以降の堆積層（墳丘流土を含む）中から崩落した葺石等とともに出土した細片が多い。墳丘を全面的に検出した割には遺物の出土は少なく、土器の風化も激しいことから形状を明らかに復元できたものは残念ながらほとんど無い。出土状況では、後円部墳頂平坦面中央部付近を除いて、確実に原位置を留めると考えられるものはなかったことから、出土位置が墳丘面に近いものを中心として出土地点の記録を行った。その分布・出土状況が第23・24図で、後円部墳頂平坦面中央部付近、後円部墳頂平坦面北東肩部から墳端、東西くびれ部付近、前方部墳頂平坦面からその東西墳端にかけて遺物の出土が集中している状況が伺える。後円部墳頂平坦面中央部付近では、若干の小円礫とともに数個体の高坏及び壺形土器がまとまって検出されており、接合状況も他地点より良好であったことから、原位置に近い出土であると考えられる。他の遺物集中地点については、墳丘斜面部が大半であり、原位置からの崩落状況を示していると考えられるが、前述のとおり風化が激しく、思うような接合ができなかったことから、原位置の想定は困難な状況である。ただし、前方部墳頂平坦面の中央やや南よりの地点及びその東西墳丘斜面の遺物については、その出土状況から平坦面上が原位置であった可能性が高い。



第23図　遺物出土状況①（1／400）



第24図　遺物出土状況②（1／20）

2　出土遺物

出土遺物の内、図化したのは土師器43点（内同一個体の可能性が高いもの２点を含む）、鉄器１点である。

土師器は前述のとおり細片が多く、全体形状を復元できたものは高坏１点のみであるが、器種としては甕、壺、高坏がある。

甕形土器（第25図1）

１は甕の頸部～胴部片で、外面に不定方向の平行叩き痕がみられ、下方に煤の付着がみられる。出土地点が不明確であり、この破片以外には明確な甕形土器の破片はない。

壺形土器（第25図2～29）

壺形土器には器形全体がわかるものは無いが、単口縁壺と二重口縁壺、長頸壺がある。

単口縁壺は、２のように頸部から外反しながら立ち上がる口縁部を有すると思われるが、胴部以下の形状については不明確である。ただし、８のように頸部に刻目突帯がみられるものがある。

二重口縁壺は、口縁部の明確なものは無いが、６・７の形状から、胴部から鋭く屈曲して直立する頸部を有し、再び鋭く外折して口縁部に向かう形状が予想される。

長頸壺には、胴部と頸部の屈曲が明瞭なもの（12・14）と緩慢なもの（13）があり、頸部には内湾気味に立ち上がるもの（14）と外反気味に立ち上がるもの（10）がある。９は口縁部先端を欠くが、直立気味の頸部から大きく外反しながら立ち上がる口縁部付近で、長頸壺と思われる。

16～29は壺形土器の底部とみられ、形状から以下のように分類できる。

１類　ほとんど丸底に近い平底（16）

２類　平底（17・18）

３類　やや突出気味の明瞭な平底（19・20）

４類　上底気味の平底（21～23）

５類　４類の形状に近く、焼成前の穿孔がみられるもの（24～29）

高坏（第26図32～43）

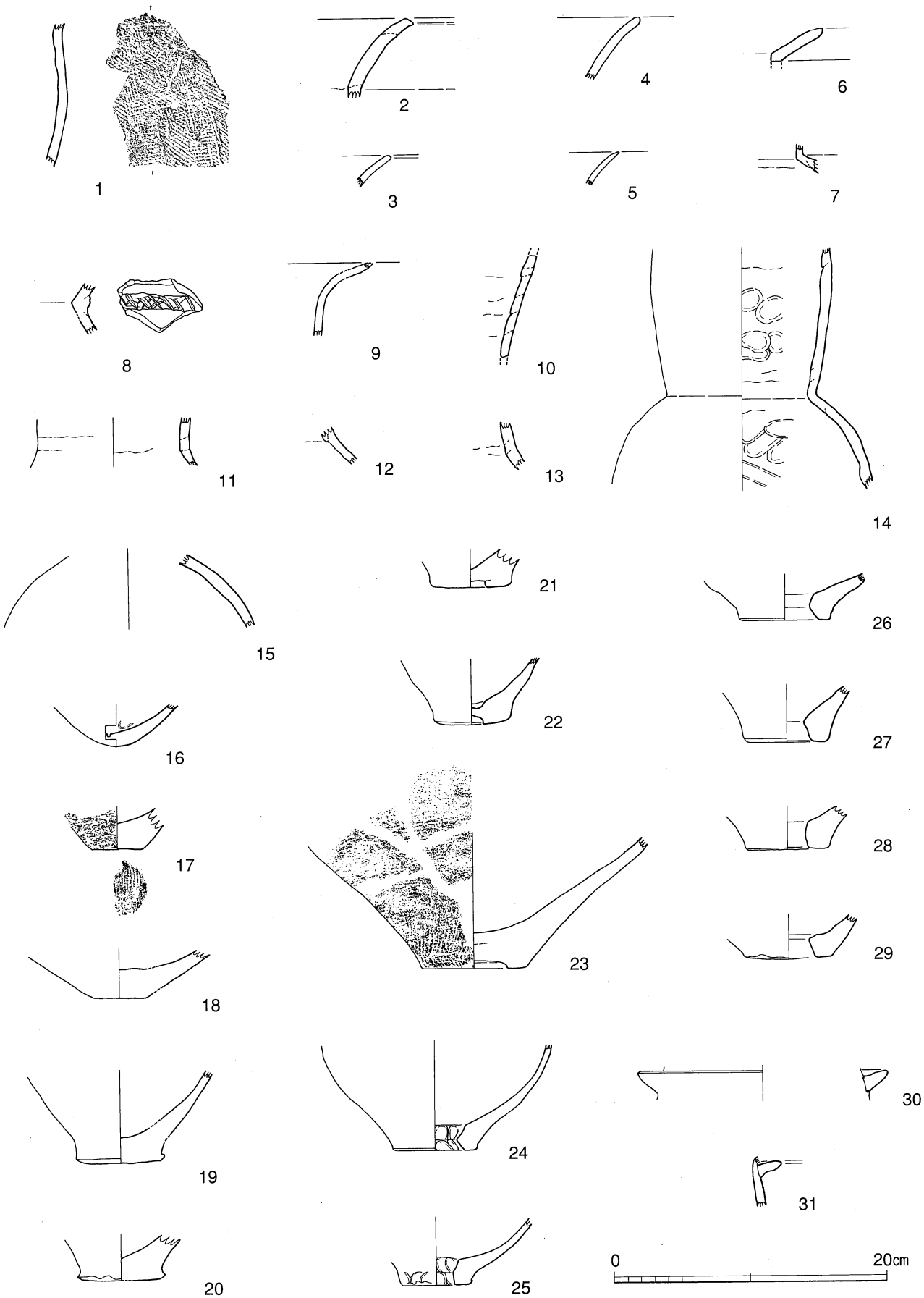
高坏は、最低でも８個体以上が出土している。図化したのは15点で、その内、32・33と40・41はそれぞれ同一個体とみられる。器形としては、総じて短脚で坏部が小さく、坏部の受部と口縁部の境がさほど明瞭でない。脚部では、脚柱部内面に指もしくは工具による強く荒い撫で調整痕跡を明瞭に残すものが多く、強く外折して裾部が直線的に外方へ開く。また、受部の見込みが残存していた４点（36～39）には、全て穿孔が施されていた。この穿孔は、土器の状況から焼成前穿孔の可能性が高い。

その他の土器（第25図31・32）

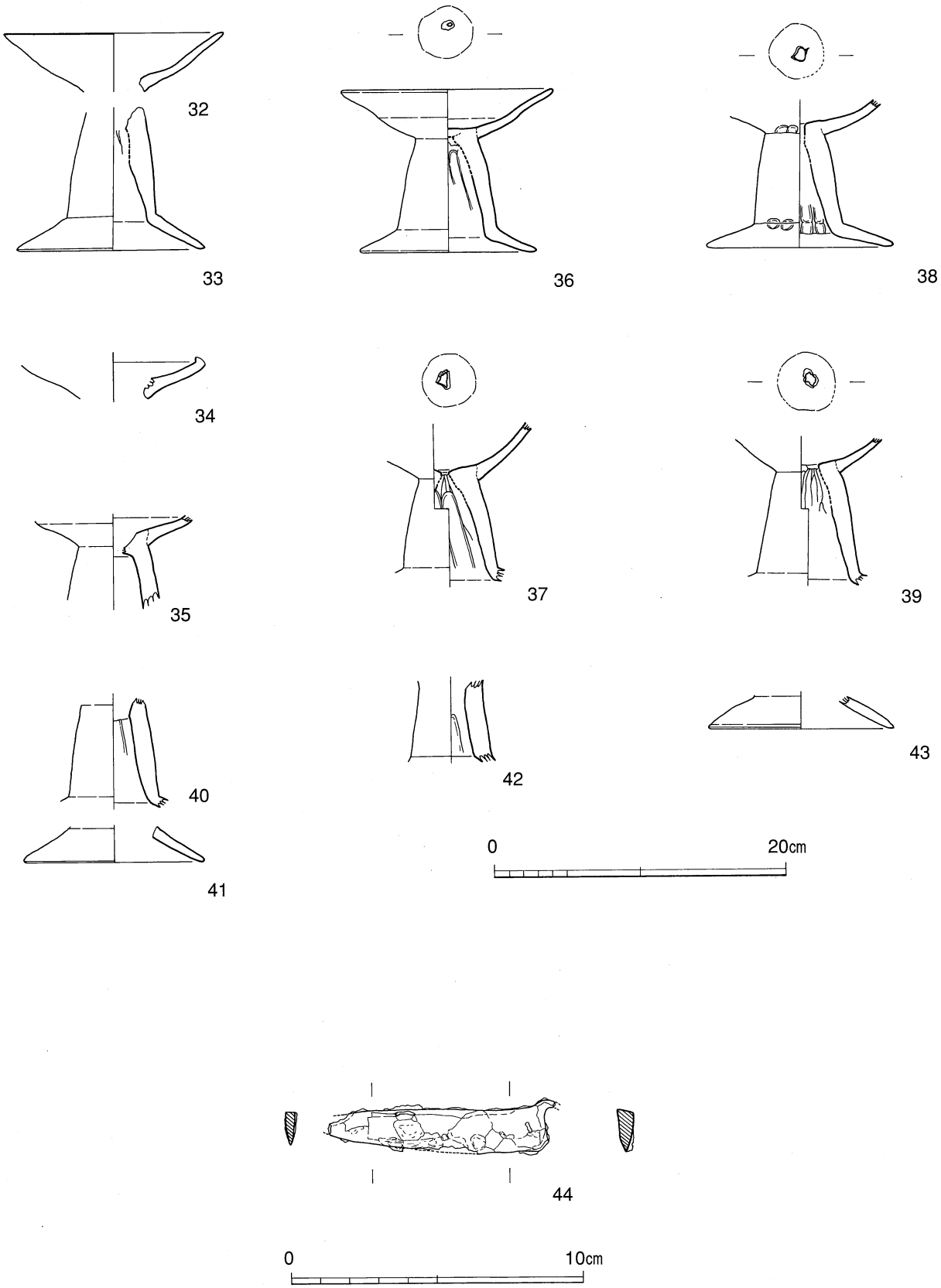
30・31は突帯を持つもので、破片が小さく器形が不明である。

鉄器（第26図44）

44は、前述したように墳丘を覆っていた堆積土からの出土であり、100号墳に伴うものであるか判然としない。小型の刀子とみられるが、頭部が環状になる可能性が高い。現存最大長7.8㎝、基部付近の幅1.6㎝、最大厚５㎜、重さ15.7ｇを計る。



第25図　出土遺物実測図①（1／4）



第26図　出土遺物実測図②（1／4，1／2）

第4表　西都原100号墳出土土器観察表

番号	種別	器種	出土地点	法量(cm) 口径	底径	器高	調整 外面	内面	色調 外面	内面	胎土	備考
1	土師器	甕形土器 頸部～胴部	不明				平行タタキ	粗いナデ	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	6ミリ以下の褐・赤褐色の砂粒を含む。	
2	〃	壺形土器 口縁部	前方部西側 墳端付近				ナデ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	4ミリ以下の褐色の砂粒、2ミリ以下の灰色の砂粒を含む。	
3	〃	〃 〃	後円部西側くびれ 部1段目斜面部				風化のため不明	ナデ？	浅黄橙 (7.5YR 8/6)	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	4ミリ以下の褐色の砂粒、1ミリ以下の黒色の砂粒、雲母を含む。	
4	〃	〃 〃	後円部墳頂 平坦面中央				〃	風化のため不明	浅黄橙 (7.5YR 8/6)	浅黄橙 (7.5YR 8/6)	5ミリ以下の灰白色の砂粒、4ミリ以下の赤褐・黒色の砂粒を含む。	
5	〃	〃 〃	後円部西側くびれ 部1段目斜面部				〃	〃	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	3ミリ以下の褐・灰色の砂粒、1ミリ以下の黒色の砂粒を含む。	
6	〃	〃 口縁部～頸部	後円部墳頂 平坦面中央				ナデ？	ナデ？	浅黄橙 (10YR 8/4)	浅黄橙 (10YR 8/4)	4ミリ以下の褐色の砂粒、1ミリ以下の赤色の砂粒を含む。	二重口縁か
7	〃	〃 〃	後円部西側くびれ 部墳端付近				〃	〃	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	3ミリ以下の褐色の砂粒、1ミリ以下の赤褐色の砂粒を含む。	〃
8	〃	〃 頸部	後円部墳頂 平坦面中央				ナデ	ナデ	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	浅黄 (2.5Y 8/4)	3ミリ以下の褐色の砂粒を含む。	
9	〃	〃 〃	〃				ナデ？	ナデ？	橙 (7.5YR 7/6)	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	4ミリ以下の褐・赤褐色の砂粒、3ミリ以下の灰白色の砂粒を含む。	
10	〃	〃 〃	前方部東側中央 １段目斜面部				ナデ	ナデ	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	浅黄橙 (10YR 8/4)	3ミリ以下の褐色の砂粒、2ミリ以下の赤褐色の砂粒、雲母を含む。	
11	〃	〃 〃	前方部東側中央 墳端付近				風化のため不明	風化のため不明	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	浅黄橙 (10YR 8/4)	3ミリ以下の褐・灰色の砂粒を含む。	
12	〃	〃 〃	後円部東側くびれ 部1段目斜面部				〃	〃	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	浅黄橙 (10YR 8/4)	2ミリ以下の褐・赤褐色の砂粒、1ミリ以下の灰白色の砂粒を含む。	
13	〃	〃 〃	前方部西側 墳端付近				〃	〃	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	3ミリ以下の褐・赤褐色の砂粒、2ミリ以下の灰白色の砂粒を含む。	
14	〃	〃 頸部～胴部	後円部西側くびれ 部墳端付近				ナデ	指ナデ 指オサエ	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	浅黄橙 (10YR 8/4)	4ミリ以下の赤褐色の砂粒、2ミリ以下の灰・白色の砂粒を含む。	ひさご形？
15	〃	〃 胴部	前方部東側 中央墳端				ナデ？	風化のため不明	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	3ミリ以下の褐・赤褐色の砂粒、2ミリ以下の灰白色の砂粒、石英、雲母を含む。	
16	〃	〃 胴部～底部	不明				〃	ナデ？	にぶい褐 (7.5YR 5/3)	橙 (5YR 6/6)	4ミリ以下の褐・赤褐色の砂粒、3ミリ以下の黒色の砂粒、1ミリ以下の灰白色の砂粒を含む。	
17	〃	〃 〃	後円部墳頂 平坦面中央		(3.8)		平行タタキ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	褐灰 (10YR 5/1)	3.5ミリ以下の褐色の砂粒、2ミリ以下の灰色の砂粒を含む。	
18	〃	〃 〃	前方部墳頂平坦面 中央片部付近		(3.7)		ナデ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	褐灰 (7.5YR 5/1)	3ミリ以下の黒褐色の砂粒を含む。	
19	〃	〃 〃	前方部東側中央 墳端付近		(6.4)		ナデ	ナデ 指オサエ	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	3ミリ以下の褐・灰・赤褐色の砂粒を含む。	
20	〃	〃 〃	前方部前端中央 墳端付近		(6.5)		ナデ	工具ナデ	浅黄橙 (10YR 8/4)	灰 (7.5Y 5/1)	3ミリ以下の灰白・褐色の砂粒、1ミリ以下の石英、雲母を含む。	
21	〃	〃 〃	後円部東南側 墳端付近		(6.0)		ナデ？	ナデ？	橙 (5YR 7/6)	浅黄橙 (10YR 8/4)	3ミリ以下の褐色の砂粒、1ミリ以下の灰白色の砂粒、石英を含む。	
22	〃	〃 〃	後円部西側 ３段目斜面部		5.5		ナデ？	ナデ？	橙 (5YR 7/6)	浅黄橙 (7.5YR 8/6)	3ミリ以下の褐・赤褐色の砂粒、2ミリ以下の灰白色の砂粒、石英を含む。	
23	〃	〃 〃	後円部墳頂 平坦面中央		7.5		平行タタキ	ナデ	橙 (5YR 7/6)	褐灰 (10YR 6/1)	5ミリ以下の褐色の砂粒、2ミリ以下の長石を含む。	
24	〃	〃 〃	後円部南西側 墳端付近		6.2		ナデ 指オサエ	ナデ 指オサエ	にぶい橙(7.5YR 7/4) にぶい黄橙(10YR 7/3)	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	3ミリ以下の褐色の砂粒、2ミリ以下の灰色の砂粒を含む。	焼成前底部穿孔
25	〃	〃 〃	後円部南西側 ３段目斜面部		4.8		〃	〃	橙 (7.5YR 7/6) にぶい黄橙(10YR 7/4)	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	2ミリ以下の褐・赤褐・灰色の砂粒を含む。	〃
26	〃	〃 〃	後円部墳頂 平坦面中央		(6.2)		粗いナデ	粗いナデ	橙 (7.5YR 7/6)	明黄褐 (10YR 7/6)	4ミリ以下の褐色の砂粒を含む。	〃
27	〃	〃 〃	前方部西側 墳端付近		(6.0)		ナデ	風化のため不明	橙 (7.5YR 7/6)	浅黄 (2.5Y 7/3)	2ミリ以下の灰・褐・赤褐色の砂粒を含む。	〃
28	〃	〃 〃	〃		(6.2)		〃	〃	橙 (7.5YR 7/6)	橙 (7.5YR 7/6)	2ミリ以下の褐・灰色の砂粒を含む。	〃
29	〃	〃 〃	後円部墳頂 平坦面片部		6.5		ナデ？	ナデ？ 指オサエ	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	浅黄橙 (7.5YR 8/6)	2ミリ以下の灰・褐・白色の砂粒を含む。	〃
30	〃	不明 突帯	後円部西側 くびれ部墳端付近				ナデ	－	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	3ミリ以下の褐色の砂粒を含む。	
31	〃	〃 〃	前方部西側 墳端付近				ナデ	ナデ？	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	3ミリ以下の褐・灰色の砂粒を含む。	
32	〃	高坏 坏部	後円部墳頂 平坦面中央	(15.0)			〃	ナデ	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	3ミリ以下の褐色の砂粒、1ミリ以下の灰色の砂粒を含む。	
33	〃	〃 脚部	〃		(12.8)		ナデ	ナデ 粗いナデ	にぶい橙(7.5YR 7/4) 浅黄橙(10YR 8/4)	浅黄橙 (10YR 8/4)	4ミリ以下の灰・白・赤褐・褐色の砂粒を含む。	
34	〃	〃 受部	後円部南西側 墳端付近				ナデ？	ナデ？	浅黄橙 (7.5YR 8/6)	淡橙 (5YR 8/4)	1ミリ以下の褐・赤色の砂粒、雲母を含む。	
35	〃	〃 受部～脚部	後円部墳頂 平坦面中央				ナデ	ナデ 粗いナデ	浅黄橙 (10YR 8/4)	浅黄橙 (10YR 8/4)	5ミリ以下の褐色の砂粒、2ミリ以下の灰色の砂粒を含む。	
36	〃	〃 口縁部～脚部	〃	(14.2)	(12.1)		〃	〃	にぶい黄橙(10YR 7/4) 浅黄橙(7.5YR 8/6) 黄橙 (10YR 8/6)	にぶい橙(10YR 7/4) 浅黄橙(7.5YR 8/6)	5ミリ以下の乳白・褐・赤色の砂粒、2ミリ以下の石英を含む。	受部に焼成前穿孔
37	〃	〃 受部～脚部	〃				〃	〃	橙 (7.5YR 7/6)	浅黄橙 (7.5YR 8/6)	5ミリ以下の褐・赤褐・灰白色の砂粒を含む。	〃
38	〃	〃 〃	〃		(12.7)		〃	〃	浅黄橙 (7.5YR 8/4,10YR 8/4)	にぶい黄橙(10YR 7/4) 浅黄橙 (10YR 8/3)	3ミリ以下の灰・赤褐・褐色の砂粒を含む。	〃
39	〃	〃 〃	〃				〃	〃	浅黄橙 (7.5YR 8/6)	浅黄橙 (7.5YR 8/6)	4ミリ以下の赤褐・褐色の砂粒、3ミリ以下の灰白色の砂粒を含む。	〃
40	〃	〃 脚柱部	〃				〃	〃	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	橙 (7.5YR 7/6)	4ミリ以下の褐・灰・黒色の砂粒を含む。	
41	〃	〃 脚裾部	〃		(12.0)		〃	ナデ	橙 (7.5YR 7/6)	橙 (7.5YR 6/6)	3ミリ以下の褐・灰色の砂粒を含む。	
42	〃	〃 脚柱部	後円部東側くびれ 部墳端付近				ナデ	粗いナデ	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	浅黄橙 (10YR 8/4)	2ミリ以下の褐・灰色の砂粒を含む。	
43	〃	〃 脚裾部	不明		(12.6)		ナデ？	ナデ？	浅黄橙 (10YR 8/4)	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	1ミリ以下の褐・灰白・赤色の砂粒を含む。	

第Ⅳ章　まとめ

第1節　墳丘形態について

前章第2節において墳丘各部の特徴を述べ、検出状況から判断されたその推定復元案を第12図に示した。この復元案における平面的な墳形は、前方部が非常に細いもので、これまでに知られている各地の古墳と比較しても類例を見いだせなかった。100号墳は出土遺物等から古墳時代前期の築造と考えられるが、前期段階の前方後円墳は墳丘形態のバリエーションが豊富で、調査事例自体もさほど多くないことから、現段階では墳形が近似する古墳を認定することはいささか困難である。第2章第3節でも触れたように、現状では墳丘測量図の比較による墳形の検討が最も有効であると考えられ、この手法による西都原古墳群内の前方後円墳の変遷案（以下、柳沢案）も提示されている[22]。この柳沢案によると、100号墳は91号、212号墳とともに箸墓類型とされ、纒向類型とされている81号墳に次ぐ時期の築造が想定されている。以前見通しを述べたことがある[23]が、今回の調査で明らかとなった100号墳の墳形を澤田氏の箸墓古墳復元案[24]と後円部の径がほぼ等しくなるように縮尺して比較したとき、前方部前端の位置はほぼ重なるが、前方部の幅に大きな違いがみられる。また、平成12年度から調査に着手した173号墳は渋谷向山類型とされているが、確認された墳丘の平面的形状は、100号墳のそれと相似関係にある可能性が高いとみられる[25]。詳細な検討については173号の報告に譲るが、両古墳の主軸断面の形状には大きな違いがあり、築造時期が異なる可能性もある。また、詳細は不明だが、212号墳では円筒埴輪が表採されており[26]、中期以降に築造された可能性がある。

100号墳と173号墳の関係から、西都原古墳群に所在する前期の前方後円墳には、畿内大王墓類型墳にあてはまらないが、墳丘の平面的地割りを共有するものが含まれている可能性がある。また、前期後半以降に日向地域で盛行する柄鏡形の前方後円墳についても同様の可能性があることから、同一古墳群や地域内における墳形の比較検討を深化させることが今後の大きな課題である。

第2節　底部穿孔壺形土器について

今回の調査によって出土した遺物の中には、焼成以前の穿孔を有する壺形土器の底部が複数含まれていた。同様の底部をもつ壺形土器は、全国の前期古墳から出土しており、壺形埴輪とも呼ばれる。ここでは、宮崎県内でこれまでに確認されている前期古墳に伴う壺形土器について紹介し、若干検討してみたい。

現在までのところ、宮崎県内において壺形土器の出土が確認されている前期古墳は、新富町下屋敷1号墳、国富町塚原古墳、西都市西都原13号墳、同100号墳、宮崎市迫内1号墳、同2号墳、同3号墳、宮崎市生目5号墳、宮崎市大淀3号墳、川南町川南33号墳の10基を数える。

下屋敷１号墳は墳丘形態が判然としないが、県内最古の古墳といわれるもので、主体部墓壙内から在地系の二重口縁壺が１点出土している[27]。壺形土器は後円部から胴部中位付近のみ遺存しており、底部の形状については不明である。壺形土器等の特徴から100号墳に先行するとみられる。

塚原古墳は長径15ｍほどの円墳で、1.5ｍほどの幅の周溝を持つ。この周溝は墳丘西側で大きく広がる部分がみられ、その部分から複数の礫と共に数個体の壺形土器が出土している。また、第図には挙げていないが、在地系の二重口縁壺も小片ながら出土している[28]。下屋敷１号と同様に100号墳より先行すると考えられる。

西都原13号墳は西都原古墳群Ａ群に分布する全長約80ｍの前方後円墳で、近年実施された発掘調査により多くの壺形土器や高坏が出土している。後円部墳頂平坦面東南側片部付近と前方部墳頂平坦面くびれ部付近では、壺形土器の配置状況がある程度把握できる出土状況が確認されている。出土した壺形土器には単口縁と二重口縁があり、二重口縁のものは焼成以前の穿孔もしくは成形時に孔を造り出した底部を有するとみられる[29]。壺形土器の形状は100号墳に最も近い。

迫内１～３号は東九州自動車道建設に伴う迫内遺跡の発掘調査により検出された古墳で、地山成形による墳丘を有する円墳である。詳細については本報告に譲るが、いずれも周溝内に壺形土器の配置が確認されている。１号墳については墳頂部の削平が激しく、主体部は確認されていないが、２・３号墳では墳頂中央部付近から墓壙が検出され、木棺直葬と推定されている。また、２・３号墳周溝内の壺形土器には焼成後の穿孔がみられるほか、３号墳の主体部墓壙上では祭祀に用いたとみられる複数の高坏や小型の坩が出土している[30]。壺形土器の形状や周溝内における壺形土器の明確な配置状況から、100号墳よりも後出するものとみられる。

生目５号墳では、近年、宮崎市教育委員会による史跡整備に伴う発掘調査が実施されている。詳細は不明だが、後円部墳頂平坦面からの転落とみられる円筒埴輪片、西側くびれ部墳端付近から単口縁の壺形土器が出土している[31]。底部の穿孔状況については不明である。長胴化した壺形土器の胴部形状や円筒埴輪の出土から100号墳よりも後出すると考えられる。

大淀３号墳は墳形は不明だが、周辺地の開発に伴う発掘調査により、周溝内等から焼成前穿孔の壺形土器が複数検出されている[32]。壺形土器の形状から100号墳に後出するとみられる。

川南33号墳は墳長63ｍほどの前方後円墳で、未調査だが、円筒埴輪片や焼成前穿孔の壺形土器底部が表採されている[33]。生目５号墳と同様に100号墳よりも後出すると考えられる。

以上、100号墳以外の９例について紹介したが、壺形土器の形状が100号墳に最も類似するものは西都原13号墳である。100号墳から出土した壺形土器の穿孔は指押さえによる比較的丁寧な成形が施されているのに対して、13号墳例では底部成形時に粘土を充填しないことによって孔を造り出すものが多い。このことは、成形時点において最初から底部を解放した壺形埴輪への変遷過程を示しているものとみることができる[34]。また、13号墳では全面的な墳丘の検出をおこなっていないにもかかわらず100号墳よりも多量の壺形土器が出土していることから、墳丘上に配置された壺形土器の数も多かったと予想される。この壺形土器成形の粗雑化や多量配置といった傾向から、100号墳は13号墳に先行する可能性が高いと考えられる。

第3節　まとめ

100号墳の築造時期を考える手がかりとしては墳丘形態及び出土土器があり、第1・2節において若干検討した。この結果、100号墳の墳丘形態は在地的墳形である可能性が高いことが明らかとなり、従来提示されていた畿内大王墓類型に当てはめた位置付けについては再検討する必要がある。また、壺形土器については13号墳よりも先行する可能性を考えたが、確証を得るには至っていない。このように築造年代を考えるには非常に根拠に乏しい状況ではあるが、現状では13号墳に先行することを前提として、前方後円墳集成編年の2～3期の範疇で考えておきたい。

註

(1) 宮　崎　県　1915 『宮崎縣兒湯郡西都古墳調査報告』
宮　崎　県　1917 『宮崎縣西都古墳調査報告』
宮　崎　県　1918 『宮崎縣史跡調査報告』第三冊
(2) 宮崎県教育委員会　1984 『特別史跡西都原古墳群』＝西都原風土記の丘＝
(3) 本事業は、平成10年度から「地方拠点遺跡等総合整備事業（歴史ロマン再生事業）」に名称が変更されている。
(4) 宮崎県教育委員会　1996 『特別史跡西都古墳群発掘調査・保存整備概要報告書』
宮崎県教育委員会　1997 『特別史跡西都古墳群発掘調査・保存整備概要報告書』(Ⅱ)
宮崎県教育委員会　1998 『特別史跡西都古墳群発掘調査・保存整備概要報告書』(Ⅲ)
宮崎県教育委員会　1999 『特別史跡西都古墳群発掘調査・保存整備概要報告書』(Ⅳ)
宮崎県教育委員会　2000 『特別史跡西都古墳群発掘調査・保存整備概要報告書』(Ⅴ)
宮崎県教育委員会　2001 『特別史跡西都古墳群発掘調査・保存整備概要報告書』(Ⅵ)
宮崎県教育委員会　2000 「鬼の窟古墳・西都原205号墳」『特別史跡西都古墳群発掘調査報告書』第1集
宮崎県教育委員会　2001 「西都原13号墳」『特別史跡西都古墳群発掘調査報告書』第2集
(5) 宮崎県教育委員会　1999 「男狭穂塚女狭穂塚陵墓参考地測量報告書」『宮崎県文化財調査報告書』第42集
(6) この地域細分案や地域的特色は、以下の報告書に同様の指摘があるが、地域名称や区分が若干異なる。
新富町教育委員会　1998 「祇園原古墳群Ⅰ」国指定史跡「新田原古墳群」史跡整備にともなう発掘調査概要報告書」『新富町文化財調査報告書』第25集
(7) 藤本貴仁　1998 「宮崎平野部の群集墳」『宮崎考古』第16号　宮崎考古学会
(8) 宮崎県埋蔵文化センター　2001 「平成12年度東九州自動車道（都濃～西都間）関係埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅰ」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第49集
(9) 古墳の基数については、近年の発掘調査等によって検出された消滅古墳等を含む。
(10) 柳沢一男　2000 「西都原古墳群」『季刊考古学』第71号　雄山閣出版
(11) 註10文献においてもほぼ同様の案が提示されている。
(12) 川西宏行　1978 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号
(13) 西都市教育委員会　1985 『昭和60年度西都原古墳研究所・年報』第3号
(14) 西都市教育委員会　2001 『平成12年度西都原古墳研究所・年報』第17号
(15) 註14に同じ
(16) 日野　巌　1932 「西都原古墳群地下式横穴の遺物配列状態」『日向』第7輯
(17) 西都市教育委員会　1996 「西都原地区遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第22号
(18) 註17に同じ
(19) 柳沢一雄　1995 「日向の古墳時代前期首町墓系譜とその消長」『宮崎県史研究』第9号　など

(20) 宮崎県教育委員会　1998 『特別史跡西都原古墳群発掘調査・保存整備概要報告書』(Ⅲ)

(21) 13号墳では、墓壙の前方部側壁面側に基底部から掘り込み上部に及ぶやや大きな礫を用いた石積みがみられた。詳細は未報告のため不明。

(22) 註10に同じ

(23) 松井豊樹　2000　「西都原古墳群における調査・研究の現状について」『琉球大学考古学研究集録』第2号

(24) 澤田秀美　1991 「墳丘からみた権現山51・50号墳」『権現山51号』『権現山51号』刊行会

(25) 未報告。調査者の和田理啓氏御教示

(26) 和田氏御教示

(27) 新富町教育委員会　1984 「新富町・下屋敷1号墳発掘調査中間報告」『宮崎考古』第9号　宮崎考古学会

(28) 宮崎県埋蔵文化財センター　2001 「塚原遺跡」東九州自動車道建設(西都～清武間)に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅸ『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第44集

(29) 宮崎県教育委員会　2001 「西都原13号墳」『特別史跡西都原古墳群発掘調査報告書』第2集

(30) 本年度報告予定で調査者の小山博氏御教示。また、遺物実測図の掲載についても同氏に御快諾頂いた。

(31) 宮崎市教育委員会　2000 「史跡　生目古墳群」保存整備事業　発掘調査概要報告書Ⅰ『宮崎市文化財調査報告書』第42集

宮崎市教育委員会　2001 「史跡　生目古墳群」保存整備事業　発掘調査概要報告書Ⅱ『宮崎市文化財調査報告書』第46集

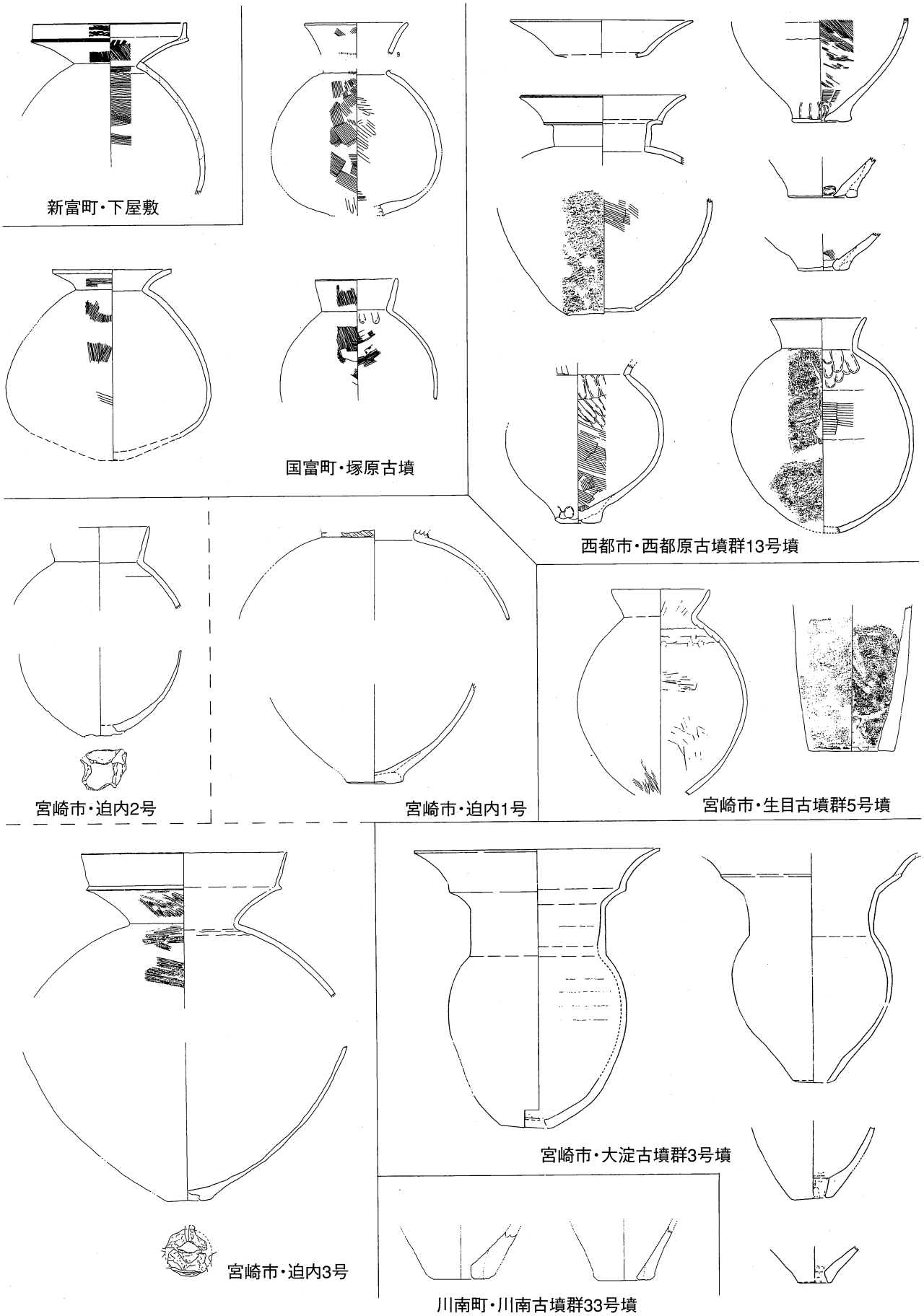
(32) 宮崎県教育委員会　1988 「大淀3号墳―県道生目通線道路改良工事に伴う発掘調査概要」『宮崎県文化財調査報告書』第31集

有馬義人ほか　2000 「宮崎県」『九州の埴輪　その地域性　―壺型埴輪・円筒埴輪・形象埴輪・石製表飾―』第3回九州前方後円墳研究会資料集　九州前方後円墳研究会

(33) 有馬義人ほか　2000 「宮崎県」『九州の埴輪　その地域性　―壺型埴輪・円筒埴輪・形象埴輪・石製表飾―』第3回九州前方後円墳研究会資料集　九州前方後円墳研究会

(34) 註29の文献の中で石川悦雄は、壺型土器の底部形態を4種に分類した上で、2類と3類の形成手法の共通性から墳墓における祭式に用いられた壺型土器の底部形状の変化について「まず破砕があり、次に底部の焼成前穿孔と変遷し、最後に最初から底部を作らない」という変遷過程を想定している。

第27図　西都原古墳群の前方後円墳（1／2000）　※男狭穂塚・女狭穂塚を除く



第28図　宮崎県内の古墳出土壺形土器・埴輪（S＝1／8）

図版1

①西都原古墳群B～E・N群（南上空から）

②西都原古墳群C・D・N群（南上空から）

図版2

①西都原古墳群主要部（北西から）

②100号墳と周辺の古墳（上空から：上が東）

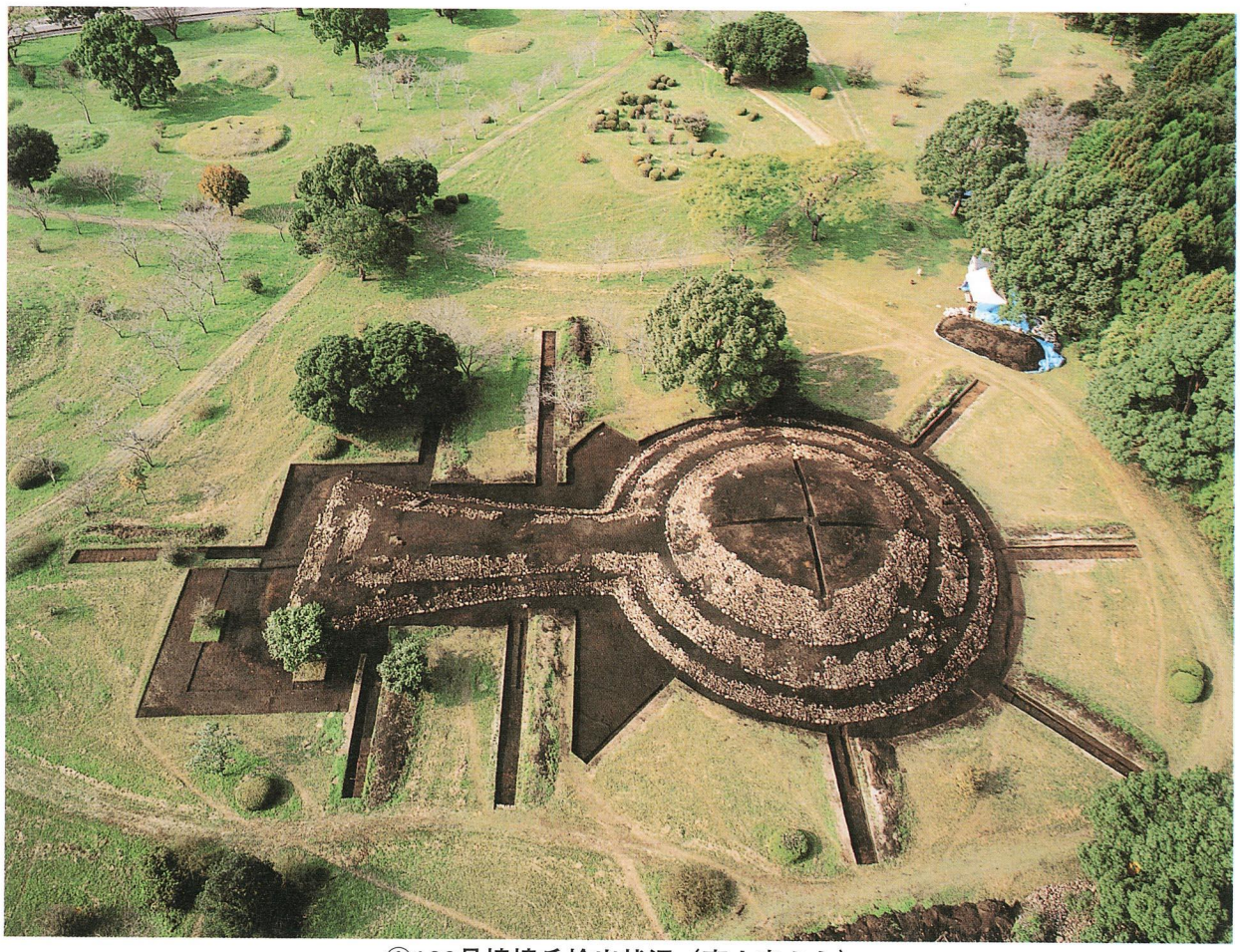
図版3

①調査以前の100号墳（東上空から）

②調査以前の100号墳（上空から：上が西）

図版4

100号墳墳丘検出状況



①100号墳墳丘検出状況（東上空から）

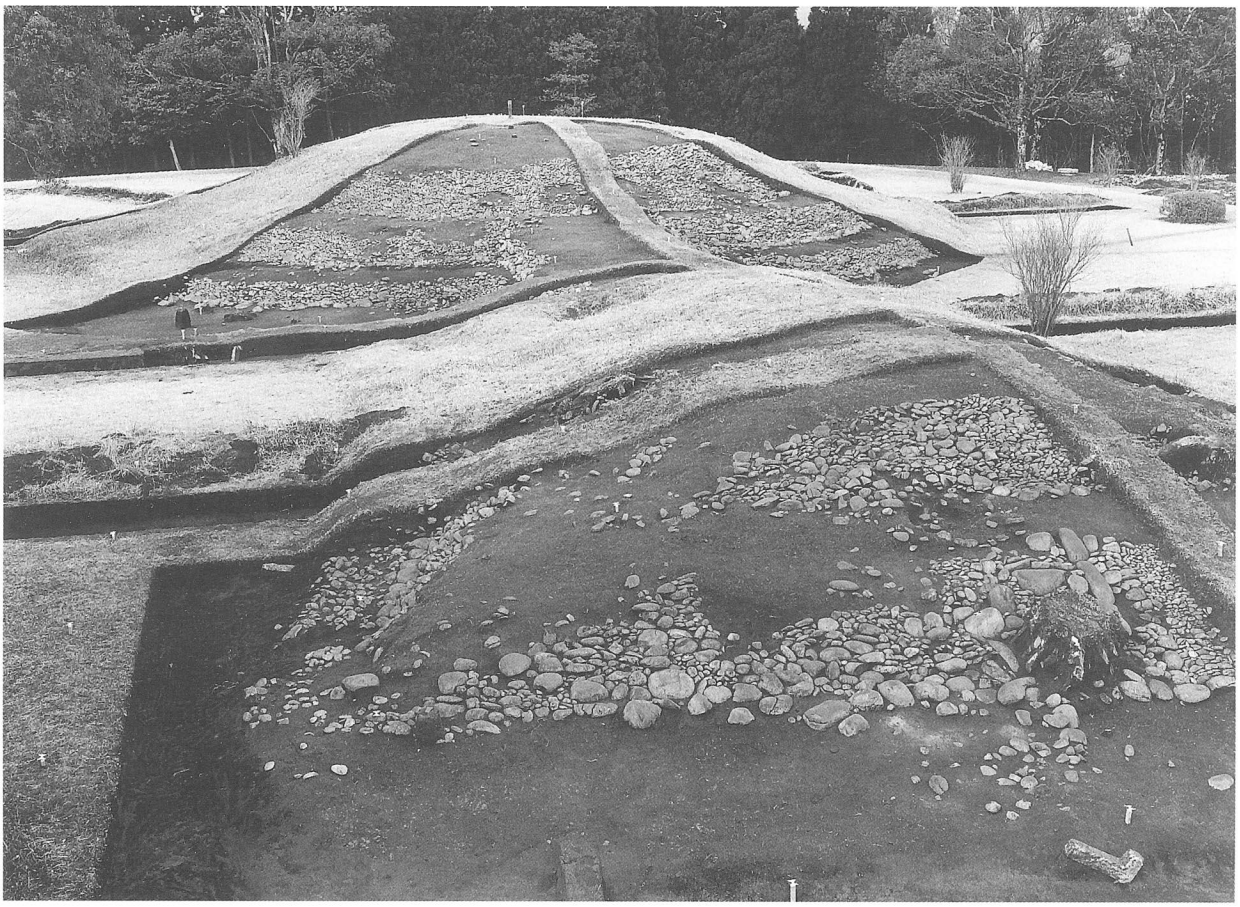
②100号墳墳丘検出状況（南上空から）

図版6

①100号墳墳丘検出状況（南東から）

②100号墳墳丘検出状況（東から）

①東側くびれ部周辺

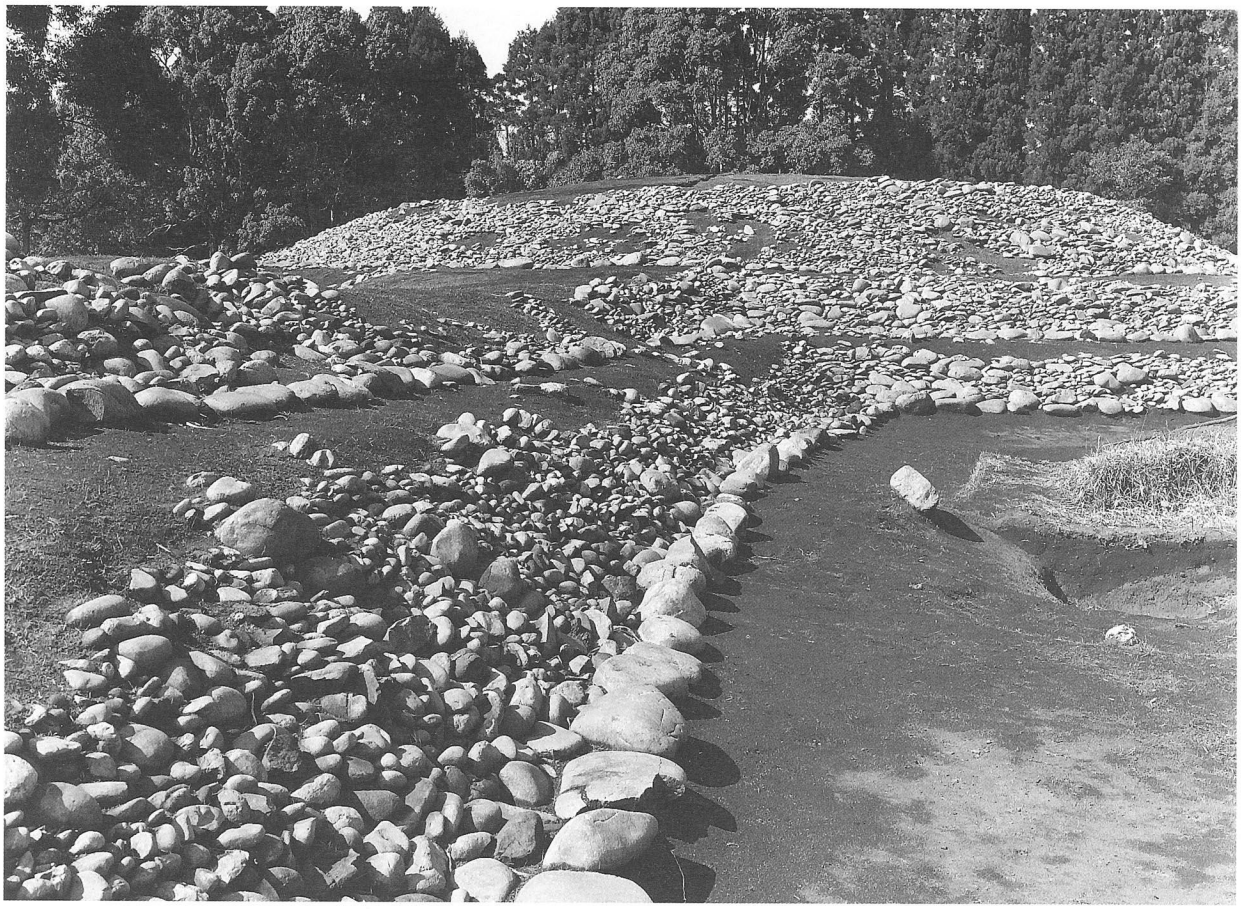


②西側隅角周辺

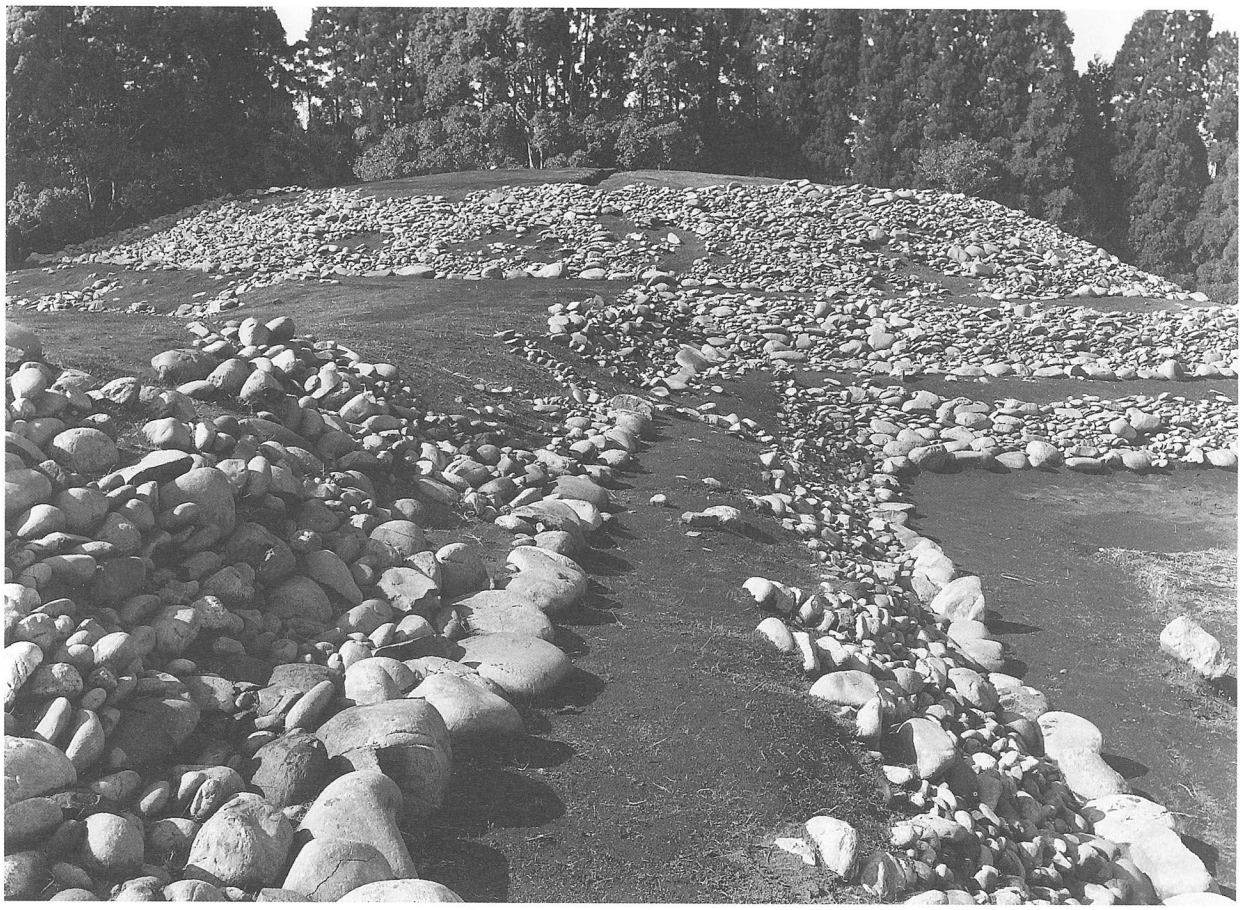
図版8

①東側隅角周辺

②東側隅角と攪乱による地形改変状況



①前方部東側１段目根石列



②前方部東側２段目根石列

図版10

①西側くびれ部周辺遺物出土状況

②①に同じ（墳丘上から）